

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第139集

しま ざき い せき
島 崎 遺 跡

でんぽう じほんごう いせき
伝法寺本郷遺跡

なか の ごう き た い せき
中之郷北遺跡

2006

(財)愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター



巻頭写真1 遺跡遠景1

- 1：鳥崎遺跡と伝法寺本郷遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）
- 2：伝法寺本郷遺跡と宇福寺遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



巻頭写真2 遺跡遠景2

1：宇福寺遺跡と中之郷北遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）

2：中之郷北遺跡と朝日遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



巻頭写真3 伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物

1：C区小区画水田（古墳時代に帰属すると推定）

2：D区古代出土遺物（折戸10号窯式期の典型的な組成、金属製品生産関連遺物が伴う）



巻頭写真4 中之郷北遺跡の調査

1：A区NR01の調査（南北に縦断する河川と杭列、7世紀に急速に埋没）

2：C区堆積状況（現地表からV層までの堆積状況）



巻頭写真5 中之郷北遺跡の遺構

1：H区SU04全景（IV d層で検出、松河戸Ⅰ式の良好な一括資料が出土）

2：Ⅰ区古墳時代中期～古代竪穴住居群（5世紀前半、5世紀後半、7世紀前半、8世紀後半の竪穴住居が重複）



1



2

巻頭写真6 中之郷北遺跡の遺物1

1：各調査区IV b・IV a層出土遺物（松河戸Ⅰ式後半～松河戸Ⅱ式前半の土器に鍛冶関連遺物が伴出）

2：H区IV d・IV c層出土土器（松河戸Ⅰ式前半の良好な層位資料）



1



2

巻頭写真7 中之郷北遺跡の遺物2

1：Ⅰ区から出土した古墳時代中期の土器（松河戸Ⅱ式～宇田Ⅱ式の資料）

2：古代の出土遺物（D・Ⅰ区から出土した8世紀の資料）



巻頭写真8 宇福寺遺跡の土器

立会調査時に採集した集合資料、月影式の器台、箱清水式の甕、線刻土器、大型壺など特徴的な個体が多い

序

濃尾平野を南北に縦断する国道 22 号線は、愛知と岐阜をつなぐ幹線道路として近代以降重要な位置を占めてきました。また過去においても美濃街道や岐阜街道などとして、尾張と美濃との関係だけではなく、この地方全域にわたっての物資や情報の主要動脈としての役割を担ってきました。

今回これらの役割をさらに推し進める目的で、名古屋高速 3 号線（県道高速清州一宮線）の建設が行われることとなりました。それを受け私ども（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会の委託事業として、平成 12 年度には島崎遺跡、平成 13 年度には伝法寺本郷遺跡と中之郷北遺跡の発掘調査を行ってまいりました。一宮市から西春町までという広範囲での調査ではありましたが、島崎遺跡では中世の集落が、伝法寺本郷遺跡では古代から中世の集落・水田が、中之郷北遺跡では古墳時代の集落が見つかるとともに、濃尾平野における遺跡の形成過程や地形環境の変化が明らかになりました。今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 18 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 古池 庸男

例 言

1. 本書は、愛知県一宮市に所在する島崎遺跡（県遺跡番号 02107：愛知県教育委員会 1994『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』）、伝法寺本郷遺跡（県遺跡番号 02108）、愛知県西春日井郡西春町中之郷北遺跡（県遺跡番号 19016）の発掘調査報告書で、西春日井郡西春町・一宮市宇福寺遺跡（県遺跡番号 19017・02114）の立会調査概要も同時に収録した。
2. 発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設にかかる事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。なお、発掘調査にあたって、株式会社四門（島崎遺跡）、リメックス株式会社（当時、現テイケイトレード株式会社、伝法寺本郷遺跡）、佐伯建設工業株式会社（伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡）より支援を受けた。
3. 調査期間と調査面積、調査担当者は、別表に示した（Ⅰ—第 2 章—第 2 表）。
4. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター 名古屋高速道路公社
一宮市教育委員会 西春町教育委員会
5. 報告書作成にかかる整理作業には、次の方々のご助力を得た。
河合明美・安達崇子（調査研究補助員） 伊藤弘江 黒川陽子 時田典子 水野留香（整理補助員）
なお、出土遺物の写真撮影は、金子和久氏（写真工房・遊）、福岡栄氏（スタジオ・ピュア）に委託した。
6. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏をはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。
青木一男 青木勘時 岩原 剛 加納俊介 小池香津江 城ヶ谷和広 鈴木とよ江 田口一郎 土本典生
原田 幹 藤澤良祐 北條献示 森 泰通 若狭 徹
7. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ—第 1～3・5 章、Ⅳ—第 1～3 章・第 4 章（8）～（10）、第 5 章、Ⅴを早野浩二（本センター調査研究員）、Ⅱを宮腰健司（本センター主査）、Ⅲ—第 4 章（1）、Ⅳ—第 4 章（1）を山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）、Ⅲ—第 4 章（2）、Ⅳ—第 4 章（6）を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、Ⅲ—第 4 章（3）を鶴飼雅弘（本センター調査研究員）、Ⅳ—第 4 章（2）を馬場健司・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）、（3）をパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、（4）を藤根久・長友純子（株式会社パレオ・ラボ）、（5）を小村美代子（株式会社パレオ・ラボ）、（7）を森勇一（愛知県立津島東高校）が担当した。
8. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
S K；土坑、S E；井戸、S B；建物、S A；柵、S T；耕作地（水田・畑地）
S D；溝、S U；遺物集積、N R；自然流路、S X；その他不明遺構
9. 発掘調査および本書で使用了座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、旧標準の「日本測地系」で表記している。
10. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
11. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24）で保管している。
13. 本書の編集はⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを早野浩二、Ⅱを宮腰健司が担当した。

目 次

巻頭写真

I	前章	1
	第1章 調査の経緯	2
	第2章 調査の経過	4
	第3章 周辺の環境	6
II	島崎遺跡	11
	第1章 遺跡の環境	12
	第2章 調査の概要	12
	第3章 遺構・遺物	15
	第4章 まとめ	49
III	伝法寺本郷遺跡	55
	第1章 調査の概要	56
	第2章 基本層序と検出遺構	58
	第3章 遺構と遺物	60
	第4章 分析・考察	92
	第5章 まとめ	104
IV	中之郷北遺跡	107
	第1章 調査の概要	108
	第2章 基本層序と検出遺構	110
	第3章 遺構と遺物	114
	第4章 分析・考察	220
	第5章 まとめ	294
V	宇福寺遺跡の調査	299
	第1章 調査の経緯	300
	第2章 立会調査の概要	304
	第3章 採集遺物の概要	310
	第4章 考察	331
	第5章 まとめ	348

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭写真 1	遺跡遠景 1	巻頭写真 5	中之郷北遺跡の遺構
巻頭写真 2	遺跡遠景 2	巻頭写真 6	中之郷北遺跡の遺物 1
巻頭写真 3	伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物	巻頭写真 7	中之郷北遺跡の遺物 2
巻頭写真 4	中之郷北遺跡の調査	巻頭写真 8	宇福寺遺跡の土器

挿図目次

〈Ⅰ 前章〉	第 29 図	E 区第 2 面遺構図
第 1 図 遺跡の位置	第 30 図	E 区東壁・北壁土層断面図
第 2 図 試掘地点と調査遺跡	第 31 図	E 区出土遺物実測図
第 3 図 権現山遺跡の縄文土器	第 32 図	F 区 SK51・52 土層断面
第 4 図 伝西大門遺跡の須恵器	第 33 図	F 区第 1 面遺構図
第 5 図 周辺の遺跡分布	第 34 図	F 区第 2 面遺構図
第 6 図 遺跡周辺の地形	第 35 図	F 区東壁・北壁土層断面図
〈Ⅱ 島崎遺跡〉	第 36 図	F 区出土銭貨拓本・X線写真
第 7 図 遺跡周辺地形図	第 37 図	F 区出土遺物実測図
第 8 図 調査区位置図	第 38 図	G 区出土遺物実測図
第 9 図 A 区 SD04・05・06・07 土層断面	第 39 図	G 区第 1 面遺構図
第 10 図 A 区第 1 面遺構図	第 40 図	G 区第 2 面遺構図
第 11 図 A 区第 2 面遺構図	第 41 図	G 区西壁・北壁土層断面図
第 12 図 A 区東壁・南壁土層断面図	第 42 図	H 区出土遺物実測図
第 13 図 A 区出土遺物実測図	第 43 図	H 区第 2 面遺構図
第 14 図 B 区 SX01 土層断面	第 44 図	H 区西壁・南壁土層断面図
第 15 図 B 区第 1 面遺構図	第 45 図	I 区第 1 面遺構図
第 16 図 B 区第 2 面遺構図	第 46 図	I 区第 2 面遺構図
第 17 図 B 区東壁・南壁土層断面図	第 47 図	I 区第 3 面遺構図
第 18 図 B 区出土遺物実測図	第 48 図	I 区東壁・北壁土層断面図
第 19 図 C 区第 1 面遺構図	第 49 図	I 区 SD01 土層断面
第 20 図 C 区第 2 面遺構図	第 50 図	I 区 SD02・03 土層断面
第 21 図 C 区東壁・南壁土層断面図	第 51 図	I 区出土遺物実測図 1
第 22 図 D 区第 2 面遺構図	第 52 図	I 区出土遺物実測図 2
第 23 図 D 区東壁・北壁土層断面図	第 53 図	J 区第 1 面遺構図
第 24 図 D 区 SK14、SK09・47・51・52 土層断面	第 54 図	J 区第 2 面遺構図
第 25 図 D 区 SK30、SK05、SK34 土層断面	第 55 図	J 区東壁・南壁土層断面図
第 26 図 D 区出土遺物実測図	第 56 図	J 区出土遺物実測図
第 27 図 E 区 SK04、SK05 土層断面	第 57 図	明治 17 年地籍図
第 28 図 E 区第 1 面遺構図	第 58 図	加工円盤分布図

第 59 図 島崎遺跡主要遺構配置図

〈Ⅲ 伝法寺本郷遺跡〉

第 60 図 試掘調査の所見

第 61 図 伝法寺本郷遺跡調査区配置図

第 62 図 伝法寺本郷遺跡検出遺構の概要

第 63 図 伝法寺本郷遺跡調査区土層断面柱状図

第 64 図 A 区東壁土層断面図

第 65 図 A 区下面遺構図

第 66 図 A 区古代出土遺物実測図

第 67 図 A 区遺構土層断面図

第 68 図 A 区上面遺構図

第 69 図 A 区中世～近世出土遺物実測図

第 70 図 A 区出土金属製品生産関連遺物実測図

第 71 図 B 区東壁土層断面図

第 72 図 B 区遺構土層断面図

第 73 図 B 区遺構図

第 74 図 B 区出土遺物実測図

第 75 図 C 区東壁土層断面図

第 76 図 C 区遺構図

第 77 図 C 区出土遺物実測図

第 78 図 D 区東壁土層断面図

第 79 図 D 区遺構図

第 80 図 D 区 SB01 遺構図・遺物出土状態図

第 81 図 D 区 SB02 遺物出土状態図

第 82 図 D 区 SB02 土層断面図

第 83 図 D 区 SK02 遺構図

第 84 図 D 区出土遺物実測図

第 85 図 八王子遺跡出土鋳型（内型）実測図

第 86 図 D 区出土金属製品生産関連遺物実測図

第 87 図 E 区遺構図

第 88 図 E 区東壁土層断面図

第 89 図 E 区出土遺物実測図

第 90 図 F 区西壁土層断面図

第 91 図 F 区出土遺物実測図

第 92 図 F 区遺構図

第 93 図 G 区東壁土層断面図

第 94 図 G 区下面遺構図

第 95 図 G 区上面遺構図

第 96 図 G 区出土遺物実測図

第 97 図 伝法寺本郷遺跡調査区と地籍図の照合

第 98 図 丹羽郡伝法寺村絵図

第 99 図 春日井郡宇福寺村絵図

第 100 図 伝法寺本郷遺跡の景観復原

〈Ⅳ 中之郷北遺跡〉

第 101 図 試掘調査の所見

第 102 図 中之郷北遺跡調査区配置図

第 103 図 中之郷北遺跡検出遺構の概要

第 104 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 1

第 105 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 2

第 106 図 A 区東壁土層断面図

第 107 図 A 区 NR01 遺構図

第 108 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 1

第 109 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 2

第 110 図 A 区 NR01 遺物出土状況

第 111 図 A 区 NR01-4 層出土遺物実測図

第 112 図 A 区 NR01- 3 層出土遺物実測図

第 113 図 A 区 NR01- 3 層出土木製品実測図

第 114 図 A 区 I 層・SD04 出土遺物実測図

第 115 図 A 区中世～近世遺構図

第 116 図 B a 区東壁土層断面図

第 117 図 B a 区 NR03・01 遺構図

第 118 図 B a 区中世～近世遺構図

第 119 図 B a 区出土遺物実測図

第 120 図 B b 区古墳時代初頭遺構図

第 121 図 B b 区東壁土層断面図

第 122 図 B b 区古墳時代中期遺構図

第 123 図 B b 区 SU01 遺物出土状態図

第 124 図 B b 区出土遺物実測図

第 125 図 C 区西壁土層断面図

第 126 図 C 区古墳時代初頭遺構図

第 127 図 C 区古代遺構図

第 128 図 C 区近世遺構図 1

第 129 図 C 区出土遺物実測図

第 130 図 D 区西壁土層断面図

第 131 図 D 区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図

第 132 図 D 区古墳時代出土遺物実測図

第 133 図 D 区古代遺構図

第 134 図 D 区 SB03 遺構図

第 135 図	D 区 SB03 竈遺構図	第 174 図	I 区西壁土層断面図
第 136 図	D 区 SB03 支脚	第 175 図	I 区古墳時代中期遺構図
第 137 図	D 区 SB01・02 遺構図	第 176 図	I 区古墳時代中期～古代遺構図
第 138 図	D 区 SB04 遺構図	第 177 図	I 区 SB09・03 遺構図
第 139 図	D 区 SB05 遺構図	第 178 図	I 区 SB10 遺構図／遺物出土状態図
第 140 図	D 区 SB06・07・08 遺構図	第 179 図	I 区 SB07 遺物出土状態図
第 141 図	D 区中世遺構図	第 180 図	I 区 SK54・80 遺物出土状態図
第 142 図	D 区古代出土遺物実測図	第 181 図	I 区古墳時代出土遺物実測図 1
第 143 図	E 区西壁土層断面図	第 182 図	I 区古墳時代出土遺物実測図 2
第 144 図	E 区古代遺構図	第 183 図	I 区 SB08・06 遺構図
第 145 図	E 区Ⅳ層・Ⅱ層出土遺物実測図	第 184 図	I 区 SB05・04・02 遺構図
第 146 図	E 区出土石製品実測図	第 185 図	I 区 SB02 竈遺構図
第 147 図	E 区中世～近世遺構図	第 186 図	I 区 SB01 遺構図
第 148 図	F 区西壁土層断面図	第 187 図	I 区古墳時代中期～古代遺構変遷図
第 149 図	F 区古代～中世遺構図	第 188 図	I 区古代出土遺物実測図 1
第 150 図	F 区近世遺構図	第 189 図	I 区古代出土遺物実測図 2
第 151 図	F 区出土遺物実測図	第 190 図	I 区古代出土遺物実測図 3
第 152 図	F 区北壁土層断面図	第 191 図	I 区古代出土遺物実測図 4
第 153 図	D・E・F 区古墳時代水田遺構全体図	第 192 図	I 区中世遺構図
第 154 図	D・E・F 区古墳時代水田遺構図	第 193 図	I 区中世出土遺物実測図
第 155 図	G 区西壁土層断面図	第 194 図	I 区鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図
第 156 図	G 区古墳時代中期／中世遺構図	第 195 図	J 区東壁土層断面図
第 157 図	G 区近世遺構図	第 196 図	J 区古代遺構図
第 158 図	G 区出土遺物実測図	第 197 図	J 区近世～近代遺構図
第 159 図	G 区出土金属製品実測図	第 198 図	J 区出土遺物実測図
第 160 図	H 区西壁土層断面図	第 199 図	J 区出土石製品・金属製品実測図
第 161 図	H 区古墳時代初頭遺構図	第 200 図	K 区西壁土層断面図
第 162 図	H 区 SU04 遺構図・遺物出土状態図	第 201 図	K 区近世～近代遺構図
第 163 図	H 区 SU01～03 遺構図・遺物出土状態図	第 202 図	K 区出土遺物実測図
第 164 図	H 区 SU04・Ⅴ層出土遺物実測図	第 203 図	調査地点の層序および分析層準
第 165 図	H 区Ⅳc 層・Ⅳb 層・SU01～03 出土遺物実測図	第 204 図	B a・B b 区の植物珪酸体含量
第 166 図	SD44 土層断面図	第 205 図	D・E 区の植物珪酸体含量
第 167 図	H 区古代遺構図	第 206 図	F・G 区の植物珪酸体含量
第 168 図	H 区中世遺構図	第 207 図	H・K 区の植物珪酸体含量
第 169 図	H 区近世遺構図	第 208 図	測定試料実測図
第 170 図	H 区近代遺構図	第 209 図	胎土分析試料実測図
第 171 図	H 区古墳時代後期～古代出土遺物実測図	第 210 図	赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図
第 172 図	H 区Ⅰ層・中世～近代出土遺物実測図	第 211 図	月縄手遺跡土坑
第 173 図	H 区出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図	第 212 図	H 区Ⅳ層中の土器群包含状況

第 213 図	H 区Ⅳ層出土土器群の組成	第 245 図	P 83 工区土器分布状況模式図
第 214 図	中之郷北遺跡Ⅳ層層位資料と月縄手遺跡土坑資料との対比	第 246 図	P 82 工区土器分布状況模式図
第 215 図	S 字甕口縁部形状の比較	第 247 図	P 80 工区土器分布状況模式図
第 216 図	高杯杯部稜径と稜深比の比較	第 248 図	調査区土層断面柱状図 1
第 217 図	松河戸遺跡 SK201 出土土器	第 249 図	調査区土層断面柱状図 2
第 218 図	I 区出土土器の変遷	第 250 図	P 86 工区採集遺物実測図
第 219 図	八王子遺跡 NR01 最上層出土土器	第 251 図	P 84 工区採集遺物実測図
第 220 図	朝日遺跡新資料館地点出土土器	第 252 図	P 83 工区採集遺物実測図 1
第 221 図	朝日遺跡各地点出土土器	第 253 図	P 83 工区採集遺物実測図 2
第 222 図	鍛冶関連遺物出土遺跡の分布	第 254 図	P 83 工区採集遺物実測図 3
第 223 図	中之郷北遺跡の轆羽口と関連資料	第 255 図	P 83 工区採集遺物実測図 4
第 224 図	福田遺跡の鍛冶関連遺物と出土遺構	第 256 図	P 83 工区採集遺物実測図 5
第 225 図	法海寺遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料	第 257 図	P 83 工区採集遺物実測図 6
第 226 図	吉田奥遺跡 3 号住居跡と出土遺物	第 258 図	P 82 工区採集遺物実測図 1
第 227 図	門間沼遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料	第 259 図	P 82 工区採集遺物実測図 2
第 228 図	大泉遺跡の轆羽口	第 260 図	P 82 工区採集遺物実測図 3
第 229 図	石川条里遺跡の轆羽口	第 261 図	P 81 工区採集遺物実測図
第 230 図	轆羽口の形態の変遷	第 262 図	P 80 工区採集遺物実測図 1
第 231 図	尾張地域における古墳時代中期の轆羽口の変遷	第 263 図	P 80 工区採集遺物実測図 2
第 232 図	四反畑遺跡と大泉遺跡の韓式系土器甌	第 264 図	廻間 I 式 0 ～ 1 段階の土器
第 233 図	権現山 1 号墳の石室	第 265 図	宇福寺遺跡器種組成（遺跡総計）
第 234 図	中之郷北遺跡と大淵遺跡の管状土鍾	第 266 図	宇福寺遺跡器種組成（各工区・遺構）
第 235 図	飯守神遺跡の「美濃」刻印須恵器	第 267 図	関連遺跡分布図
第 236 図	美濃須衛産須恵器の諸例	第 268 図	箱清水式の主要器種
第 237 図	三河型甕の諸例と関連資料	第 269 図	宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器
第 238 図	川原石積み横穴式石室・「美濃」刻印須恵器・三河型甕・製塩土器の分布	第 270 図	箱清水式土器様式圏における東海系土器
第 239 図	中之郷北遺跡の景観復原	第 271 図	北陸系土器と関連資料
第 240 図	中之郷北遺跡調査区と地籍図の照合	第 272 図	布留式土器と関連資料
第 241 図	春日井郡中之郷村絵図	第 273 図	受口甕と S 字甕 0 類
〈V 宇福寺遺跡の調査〉		第 274 図	朝日遺跡の布留式甕
第 242 図	試掘調査の所見	第 275 図	畿内における東海系と山陰系の共存
第 243 図	宇福寺遺跡立会調査工区―北半	第 276 図	宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の土器に施された線刻
第 244 図	宇福寺遺跡立会調査工区―南半	第 277 図	宇福寺遺跡の範囲と周辺の変遷

写真目次

〈Ⅰ 前章〉

- 写真 1 遺跡の現況
- 写真 2 馬見塚遺跡
- 写真 3 稲荷山古墳と高塚古墳
- 写真 4 現況の島畑

〈Ⅱ 島崎遺跡〉

- 写真 5 調査区の位置
- 写真 6 調査区遠景
- 写真 7 調査風景
- 写真 8 A区
- 写真 9 B区
- 写真 10 C区
- 写真 11 D区
- 写真 12 E区
- 写真 13 F区
- 写真 14 G区
- 写真 15 H区

写真 16 I区第1面

写真 17 I区第2面

写真 18 I区第3面

写真 19 J区

写真 20 各調査区出土遺物 1

写真 21 各調査区出土遺物 2

〈Ⅲ 伝法寺本郷遺跡〉

- 写真 22 伝法寺本郷遺跡調査風景
- 写真 23 A区NR01
- 写真 24 A区上面遺構
- 写真 25 B区NR01／上面遺構
- 写真 26 C区下面／上面遺構
- 写真 27 D区遺物出土状況
- 写真 28 D区古代遺構
- 写真 29 D区出土金属製品生産関連遺物
- 写真 30 E～G区全景／E区下面／上面遺構全景
- 写真 31 F区下面／上面遺構
- 写真 32 G区下面／上面遺構全景
- 写真 33 各調査区出土遺物
- 写真 34 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 1

写真 35 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 2

写真 36 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 3

〈Ⅳ 中之郷北遺跡〉

- 写真 37 中之郷北遺跡調査風景
- 写真 38 A区NR01
- 写真 39 A区出土遺物
- 写真 40 A区出土木製品
- 写真 41 A区NR01遺物出土状況
- 写真 42 A区土層断面／中世～近世遺構
- 写真 43 B a 区土層断面／NR01／中世～近世遺構
- 写真 44 B b 区古墳時代初頭遺構／SU01
- 写真 45 古墳時代初頭遺構
- 写真 46 C区西壁土層断面
- 写真 47 C区古代／近世遺構全景
- 写真 48 B a ・ B b ・ C区出土遺物
- 写真 49 D区古墳時代初頭／古墳時代後期遺構全景
- 写真 50 D区IV b 層遺物出土状況
- 写真 51 D区古代／中世遺構
- 写真 52 D区出土遺物
- 写真 53 E区古墳時代／古代／中世～近世遺構
- 写真 54 D区古墳時代水田全景
- 写真 55 F区古墳時代／古代～中世遺構
- 写真 56 G区NR02／NR01／近世遺構／土層断面
- 写真 57 G区出土金属製品X線写真
- 写真 58 E ・ F ・ G区出土遺物
- 写真 59 H区古墳時代初頭／前期遺構
- 写真 60 H区古墳時代中期遺構
- 写真 61 H区古代／中世／近世／近代遺構全景
- 写真 62 H区出土遺物 1
- 写真 63 H区出土遺物 2
- 写真 64 I区NR01全景
- 写真 65 I区古墳時代中期～古代遺構全景
- 写真 66 I区 1 期竪穴住居
- 写真 67 I区 2 期竪穴住居
- 写真 68 I区土坑遺物出土状況
- 写真 69 I区古墳時代（1 ・ 2 期）出土遺物
- 写真 70 I区 3 期竪穴住居

写真71	I区4期竪穴住居1	写真89	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真5
写真72	I区4期竪穴住居2	写真90	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真6
写真73	I区中世遺構全景	写真91	福田遺跡の韃羽口先端部分
写真74	I区古代・中世出土遺物	写真92	法海寺遺跡の韃羽口
写真75	鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品		〈V 宇福寺遺跡の調査〉
写真76	J区東壁土層断面	写真93	宇福寺遺跡調査風景
写真77	J区古代／近世遺構全景	写真94	P83工区土層断面／遺物出土状況
写真78	J区中世～近代遺構全景	写真95	P82工区土層断面
写真79	K区近世～近代遺構／土層断面	写真96	P81／P80工区土層断面
写真80	植物珪酸体顕微鏡写真1	写真97	布留式高杯（5）の製作技法
写真81	植物珪酸体顕微鏡写真2	写真98	P83工区採集遺物1
写真82	土器薄片の顕微鏡写真	写真99	P83工区採集遺物2
写真83	赤色顔料の付着状況	写真100	P83工区採集遺物3
写真84	測定に使用した赤色顔料	写真101	P82工区採集遺物1
写真85	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真1	写真102	P82工区採集遺物2
写真86	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真2	写真103	P80工区採集遺物
写真87	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真3	写真104	脚頂部のキザミ（門間沼遺跡）
写真88	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真4		

挿表目次

〈Ⅰ 前章〉	第12表	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
第1表 調査工程表	第13表	出土土器の詳細とその肉眼的特徴
〈Ⅱ 島崎遺跡〉	第14表	出土土器の粘土と砂粒の特徴
第2表 F区出土銭貨一覧表	第15表	胎土中の岩石片の分類と組み合わせ
〈Ⅲ 伝法寺本郷遺跡〉	第16表	赤色顔料から検出された元素と顔料の種類
第3表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	第17表	出土木製品・木材の樹種同定結果一覧
第4表 A区 NR01 出土自然木樹種同定結果一覧	第18表	形状・層位ごとの検出樹種集計
〈Ⅳ 中之郷北遺跡〉	第19表	中之郷北遺跡から産出した昆虫化石
第5表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	第20表	H区Ⅳ層出土土器群の組成
第6表 分析試料一覧	第21表	松河戸・宇田式土器編年と放射性炭素年代測定値との対比
第7表 B a・B b 区の植物珪酸体分析結果	第22表	鍛冶関連遺物一覧表
第8表 D・E 区の植物珪酸体分析結果	〈Ⅴ 宇福寺遺跡の調査〉	
第9表 F・G 区の植物珪酸体分析結果	第23表	編年対照表
第10表 H・K 区の植物珪酸体分析結果	第24表	宇福寺遺跡器種組成表（遺跡総計）
第11表 測定試料及び処理	第25表	宇福寺遺跡器種組成表（各工区・遺構）

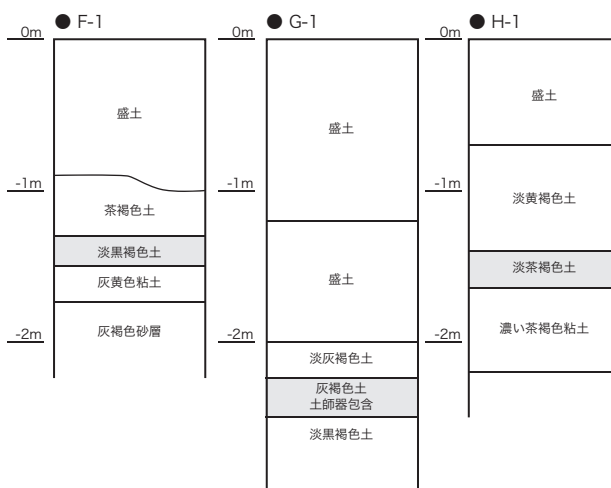
V 宇福寺遺跡の調査

第1章 調査の経緯

遺跡の発見

立会調査

宇福寺遺跡は、県道高速清洲一宮線建設予定工区内、伝法寺本郷—中之郷北遺跡間の工区において新たに発見された遺跡である。遺跡の範囲に含まれる工区は、名古屋高速3号線関連埋蔵文化財試掘調査の結果（試掘地点 F-1、G-1、H-1、第2・242 図）、立会調査による対応が必要であるとされた地区に相当し、計 22 工区（P 89～69・A 74、第 243・244 図）における掘削立会が協議により



第242図 試掘調査の所見

中之郷北遺跡

決定されていた。また、中之郷北遺跡の調査所見から、A 区（P 65 工区）以北における遺跡の存在が確実視され、中之郷北遺跡以北の橋脚建設予定地の掘削時には、愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を密に図り、掘削状況を注視する必要があることを、2002 年 2 月 21 日に改めて名古屋高速道路公社と工事関係団体に示した。

遺跡の登録

その後、3 月に最初に掘削工事が実施された P 83 工区では、古墳時代の遺物が大量に発見され、遺跡を中之郷北遺跡、伝法寺本郷遺跡とは区別し、宇福寺遺跡として新たに登録することが西春町教育委員会との協議において決定された（遺跡番号 19017・02114）。なお、P 86 工区、P 84 工区の調査所見から、遺跡は五日市場交差点以北の一宮市伝法寺地内に及ぶことも明らかであった。しかし、愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターが計 25 工区（P 89～66・A 74）の掘削立会に対応することは現実的に困難で、可能な範囲で財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が立会調査に協力し、遺物の採取、調査所見の記録に努めた。掘削工事は 2002 年 4 月以降も継続したが、実際にいずれかの職員が掘削に立ち会うことができた工区は 11 工区のみにとどまった。試掘調査の結果、愛知県教育委員会自らが 22 工区における立会調査を必要とする旨を通達していたにもかかわらずである。また、掘削工事に立ち会うことができた工区においても、担当者が終始、掘削に立ち会うことは難しく、担当者が不在のまま、包含層や遺構の大部分が重機によって掘削され、大量の遺物が失われてしまった工区も少なくない。

上記の経緯によって調査された宇福寺遺跡の報告は恥ずべき失態を披瀝することにほかならない。厳しい条件下の試掘調査であったとはしても、遺跡の範囲を決定する有効な情報が事前に入手できなかったこと、立会調査を実施するにあたって、組織的な対応が十分できなかったことを問題点としてここに掲げておきたい。



P83工区調査風景 1



P83工区調査風景 2



P82工区調査風景



P81工区調査風景



P80工区調査風景



P78工区調査風景

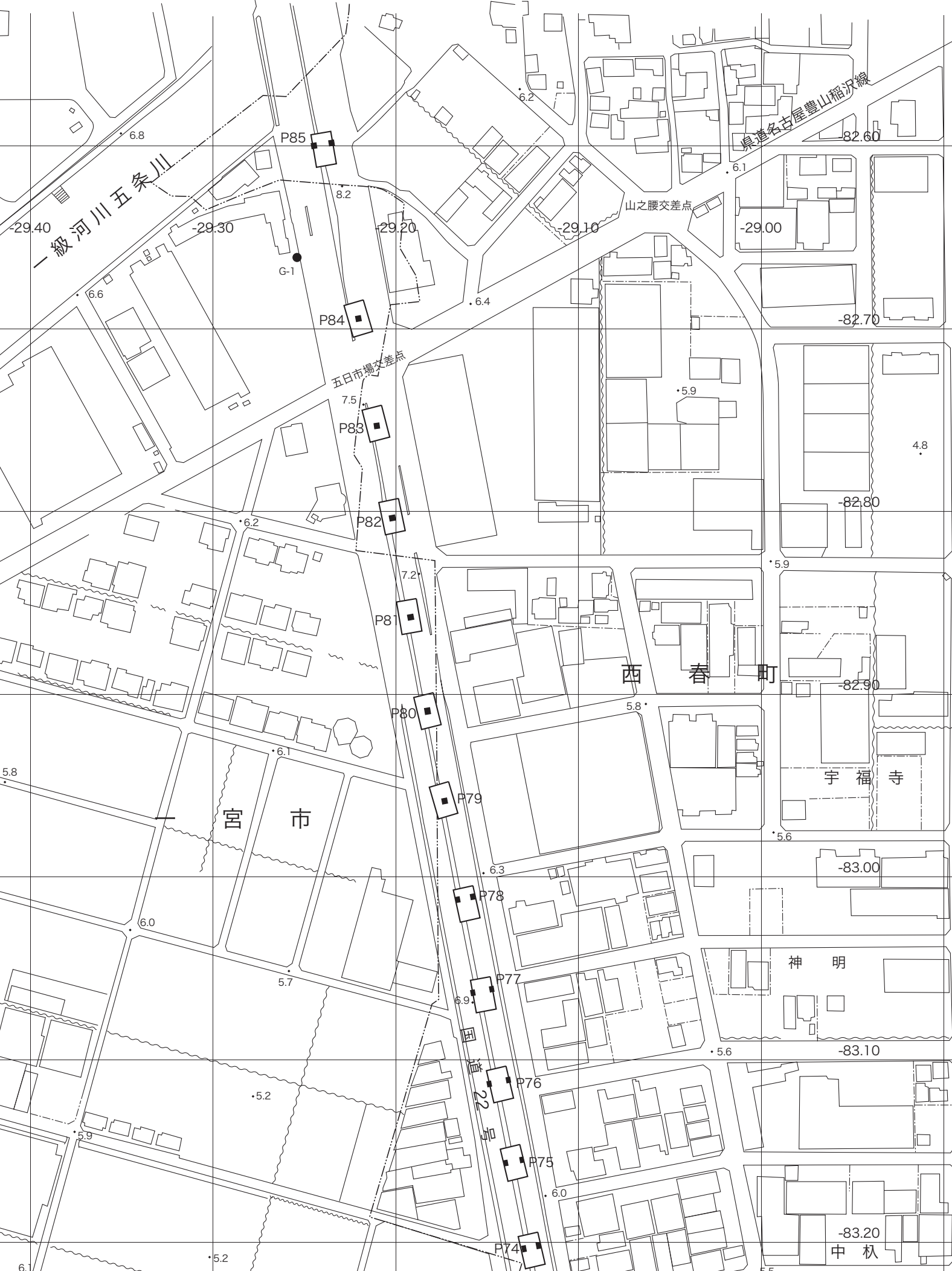


P77工区調査風景



P70工区調査風景

写真93 宇福寺遺跡調査風景



第243図 宇福寺遺跡立会調査工区一北半 (1:2,500)



第244図 宇福寺遺跡立会調査工区一南半 (1:2,500)

第2章 立会調査の概要

P86工区

古墳時代と中世

五条川以北、一宮市丹陽町伝法寺地内の工区である。道路面(標高約 8.5 m)から深さ 2.0 ～ 3.0 m までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に愛知県教育委員会の職員が立ち会った。結果、古墳時代と中世の遺物を少量採取した。

P84工区

古墳時代

五条川以南、五日市場交差点以北、一宮市丹陽町五日市場地内の工区である。道路面(標高約 8.0 m)から深さ 2.0 ～ 3.0 m までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県教育委員会の職員が立ち会った。結果、古墳時代の遺物を少量採取した。

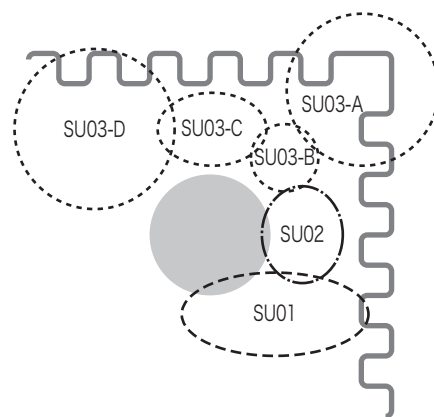
P83工区

古墳時代の土器

五日市場交差点以南、西春町山之腰地内の工区である。道路面(標高約 7.5 m)から深さ約 3.0 m(標高約 4.5 m)までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。結果、北東の一画を中心として古墳時代前期の土器が大量に出土した。

層序は上位から、黄褐色シルト質砂(層厚約 40cm、以下同じ)、1層—暗褐色シルト質砂(約 15cm)、2層—灰色シルト質砂・黄灰色中粒砂・青灰色中粒砂(約 35cm)、3層—灰色粘土(約 10cm)、黒色粘土(約 25cm)、青灰色シルト(30cm 以上)である。土器は1層から3層にかけて包含され、特に1層に濃密であった。これらの所見から、土器が包含される層の標高は 3.5 ～ 4.0 m、鍵層となる黒色粘土層上面の標高は約 3.5 m とみられる。なお、土器を包含する堆積層には炭化物も濃密に認められた。

土器は工区の北東の一画に、南北約 2.5 m、東西約 3.0 m の範囲にまとまって出土した。出土した土器群は地点に応じて、SU01、SU02、SU03 A、SU03 B、SU03 C、SU03 D に区分して採取した(第 245 図)。1層以下は、土層



第245図 P83工区土器分布状況模式図



写真94 P83工区土層断面／遺物出土状況

1：土層断面 2：遺物出土状況

の圧密化によって堆積土が固結し、土器の遺存状況は概して良好でなかった。明確な遺構は認識できなかったが、相対的に SU03 の土器群が上位、SU02 の土器群が中位、SU01 の土器群が下位に重複しつつ包含されている状況が観察された。

P82工区

五日市場交差点以南、西春町山之腰地内の工区である。道路面（標高約 7.2 m）から深さ約 3.0 m（標高約 4.2 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。結果、南東の一面を中心として古墳時代前期の土器が大量に出土した。

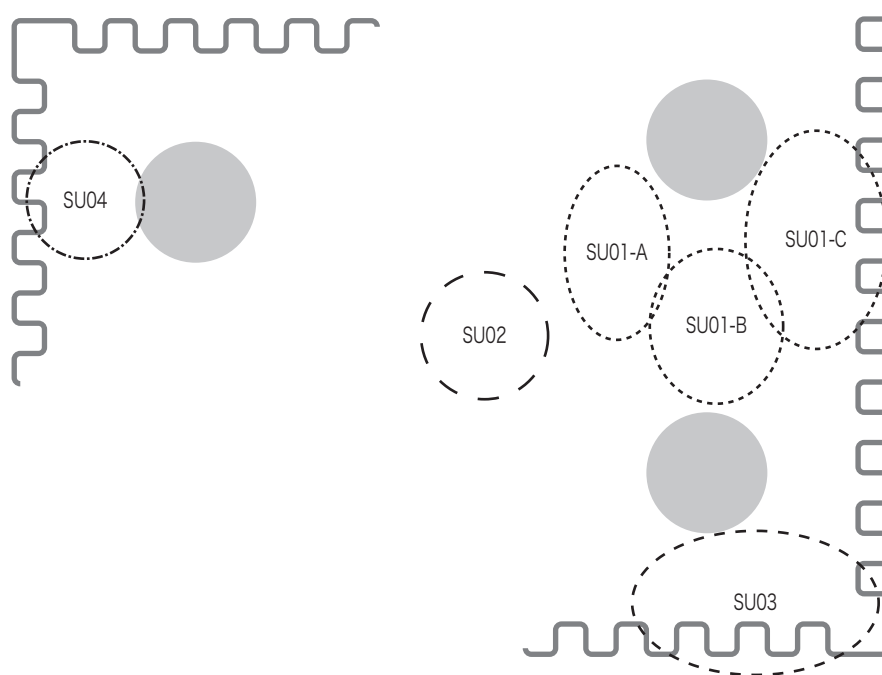
古墳時代の土器

層序は上位から、灰黄色シルト（層厚約 20cm、以下同じ）、暗褐色粘土（約 20cm）、1 層—黄灰色中粒砂・シルト（約 40cm）、2 層—青灰色砂（約 40cm）、灰色粘土（約 40cm）、黒色粘土（約 20cm）で、青灰色粘土に達する。土器は 1 層と 2 層、およそ標高 3.5 ～ 4.0 m に包含されていた。鍵層となる黒色粘土層上面の標高は約 2.6 m とみられる。

土器は工区の南東の一面でまとまって出土したが、これらに関する遺構は明確でなかった。出土した土器群は地点に応じて SU01 A、SU01 B、SU01 C、SU02、SU03 に区分し、南西の一面においてもややまとまって出土した土器群を SU04 とした（第 246 図）。SU01 A は灰色粘土と下位の粗粒砂層中、SU01 B は炭化物を濃密に含んだ黒褐色土層中、SU02 は青灰色・灰白色粘土層中、SU03 は灰褐色粘土層中に土器群が包含されていた。



写真95 P82工区土層断面



第246図 P82工区土器分布状況模式図

P81工区

古墳時代の土器

一宮市丹陽町五日市場地内の工区である。道路面（標高約 7.2 m）から深さ約 2.0 m（標高 5.2 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。結果、古墳時代前期の土器が出土した。

層序は上位から、黒色粘土（層厚約 15cm、以下同じ）、灰色砂質シルト（約 25cm）、黄灰色細粒砂（約 40cm）、灰白色細粒砂（約 10cm）、暗褐色粘土（約 20cm）、褐色粘土（約 15cm）、灰色粘土（約 15cm）、灰色中粒砂（約 15cm）、青灰色中粒砂（約 25cm）で、粗粒砂と青灰色シルトの斑土に達する。最上位の黒色粘土は近代の整地土で、土器は褐色粘土層・灰色粘土層（上層）中と青灰色中粒砂層（下層）中に包含されていたが、明確な遺構は確認できなかった。土器が包含される標高は 4.0 m 前後とみられる。

土器の出土は散漫で、褐色粘土層・灰色粘土層（上層）と青灰色中粒砂層（下層）に区分して採取した。

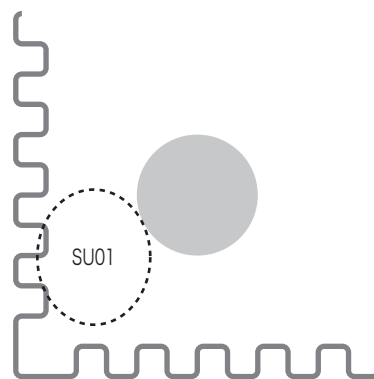
P80工区

古墳時代の土器

一宮市丹陽町五日市場地内の工区である。道路面（標高約 6.8 m）から深さ約 2.0 m（標高約 4.8 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。しかし、すでに工区の南西の一面を残して二次掘削が終了していた。わずかに残された南西の一面では古墳時代前期の土器が大量に出土した。

層序は上位から灰色シルト（層厚約 35cm、以下同じ）、褐色シルト（約 30cm）、灰色粘土（約 20cm）、暗褐色粘土（約 10cm）、暗褐色中粒砂（約 20cm）、灰色粘土（約 10cm）、灰色中粒砂（約 40cm）、灰白色粗粒砂（約 25cm）、灰色粘土（約 25cm）、黒色粘土（約 20cm）で、灰色粘土に達する。土器は灰色粘土層中と灰色中粒砂層中に包含され、土器が包含される標高は 3.5 m 前後とみられる。鍵層となる黒色粘土層上面の標高は約 2.8 m とみられる。

土器は南西の一面でややまとまって出土し、SU01（第 247 図）として採取したが、これに関係する明確な遺構は確認できなかった。一方、すでに掘削が終了した部分からも土器が出土したとのことであった。



第247図 P80工区土器分布状況模式図

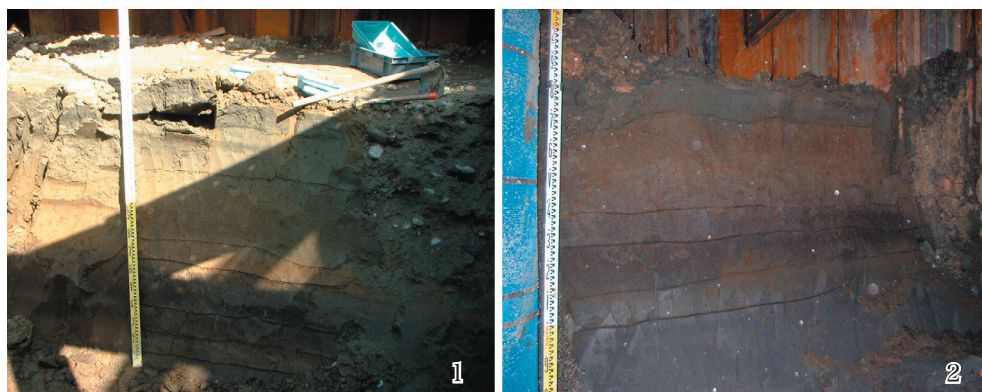


写真96 P81/P80工区土層断面

1：P81工区土層断面 2：P80工区土層断面

P78工区

P 79 工区以南の工区は西春町宇福寺地内に含まれる。道路面（標高約 6.3 m）から深さ約 2.0 m（標高約 4.3 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。遺物の出土は認められなかった。

後背地

層序は上位から黒褐色粘土（層厚約 5 cm、以下同じ）、青灰色粘土（約 10cm）、黒褐色粘土（約 15cm）、灰色粗粒砂（約 15cm）、灰色粘土（約 10cm）、黒褐色粘土（約 15cm）、灰色粗粒砂（約 15cm）、灰色粘土（約 10cm）、黒褐色粘土（約 15cm）、灰色粘土（約 25cm）、黒色粘土（約 10cm）、灰色粘土（約 20cm）で、灰白色粘土に達する。なお、黒色粘土層の上面の標高は約 3.0 m とみられる。標高 3.0 m 付近まで層序を確認したものとみられるが、標高 3.5 m 付近から以下は、灰色と黒色を基調とする粘土層が交互に堆積するのみで、遺構や遺物包含層は確認されなかった。これらの所見から、本工区付近は後背地に相当しているものと考えられる。

P77工区

道路面（標高約 6.9 m）から深さ約 3.0 m（標高約 3.9 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。

河川

上位には植物遺体を多く含む層が堆積し、その下位は灰白色粘土と黒色粘土の斑土、黒褐色粘土、灰色粘土、青灰色粘土が交互に堆積する。これらの層は河川内の堆積層と判断される。なお、遺構、遺物包含層は確認されなかった。

P76工区

道路面（標高約 6.2 m）から深さ約 2.0 m（標高約 4.2 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。

河川

堆積層は上位から、斜層理が発達した灰白色砂、植物遺体を大量に含む青灰色砂と灰色粘土の互層、植物遺体層、灰色中粒砂である。これらは河川内の堆積物と判断される。植物遺体層や灰色中粒砂層からは、大量の自然木や桃核が出土したが、木製品、その他の出土遺物は認められなかった。

P71工区

道路面（標高約 6.0 m）から深さ約 2.0 m（標高約 4.0 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。

後背地

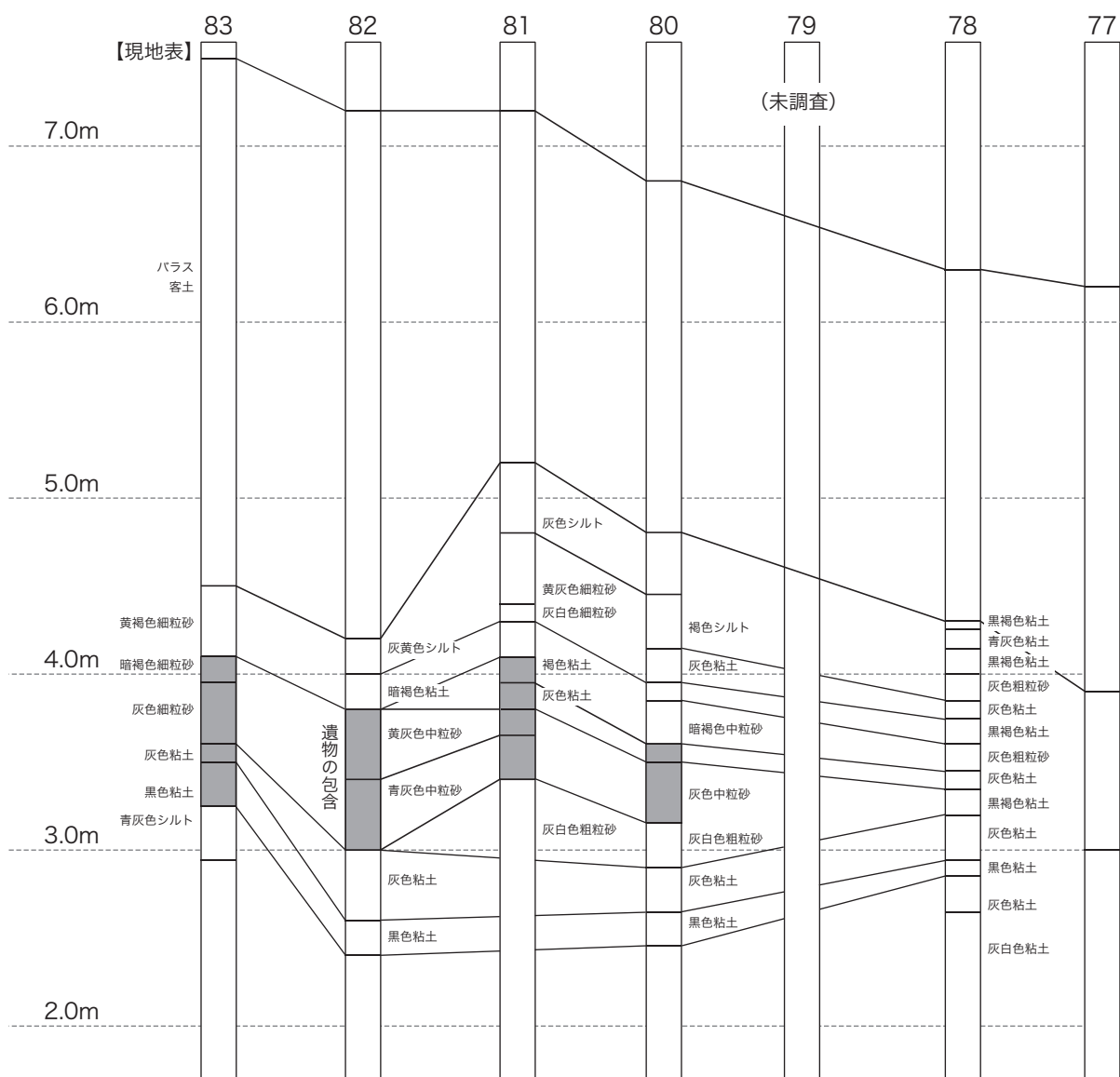
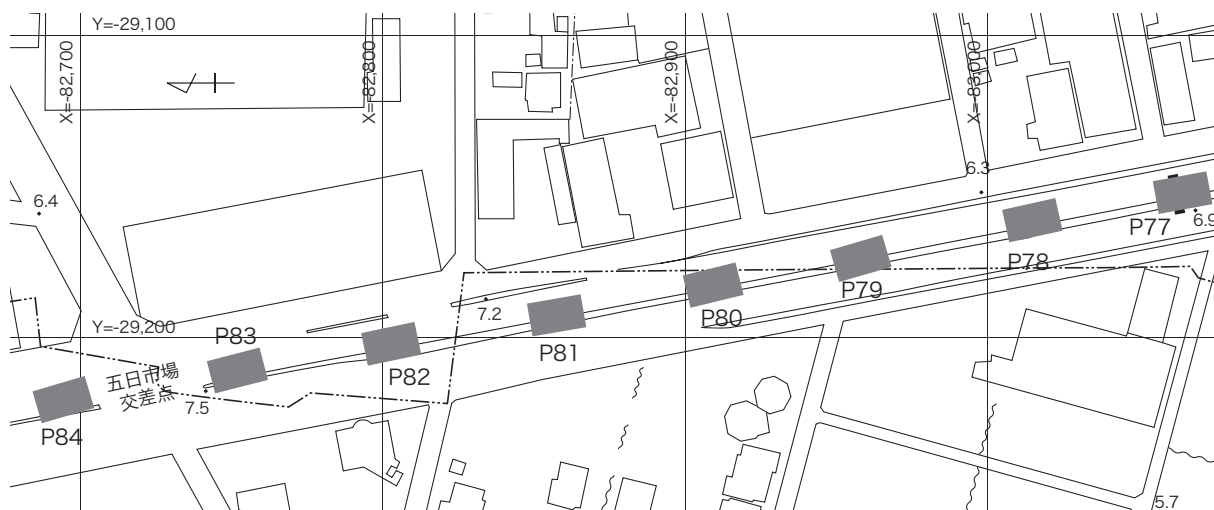
層序は上位から、暗褐色粘土（層厚約 20cm、以下同じ）、灰白色粘土（約 10cm）、黒褐色粘土（約 10cm）、灰色粘土（約 50cm）、黒褐色粘土（約 10cm）、灰色粘土（約 20cm）、黒色粘土（約 10cm）、黒褐色粘土（約 10cm）で、灰色粘土（20cm 以上）に達する。なお、黒色粘土層の上面の標高は約 2.8 m とみられる。明確な遺物包含層、遺構とも認められず、遺物も出土しなかった。

P70工区

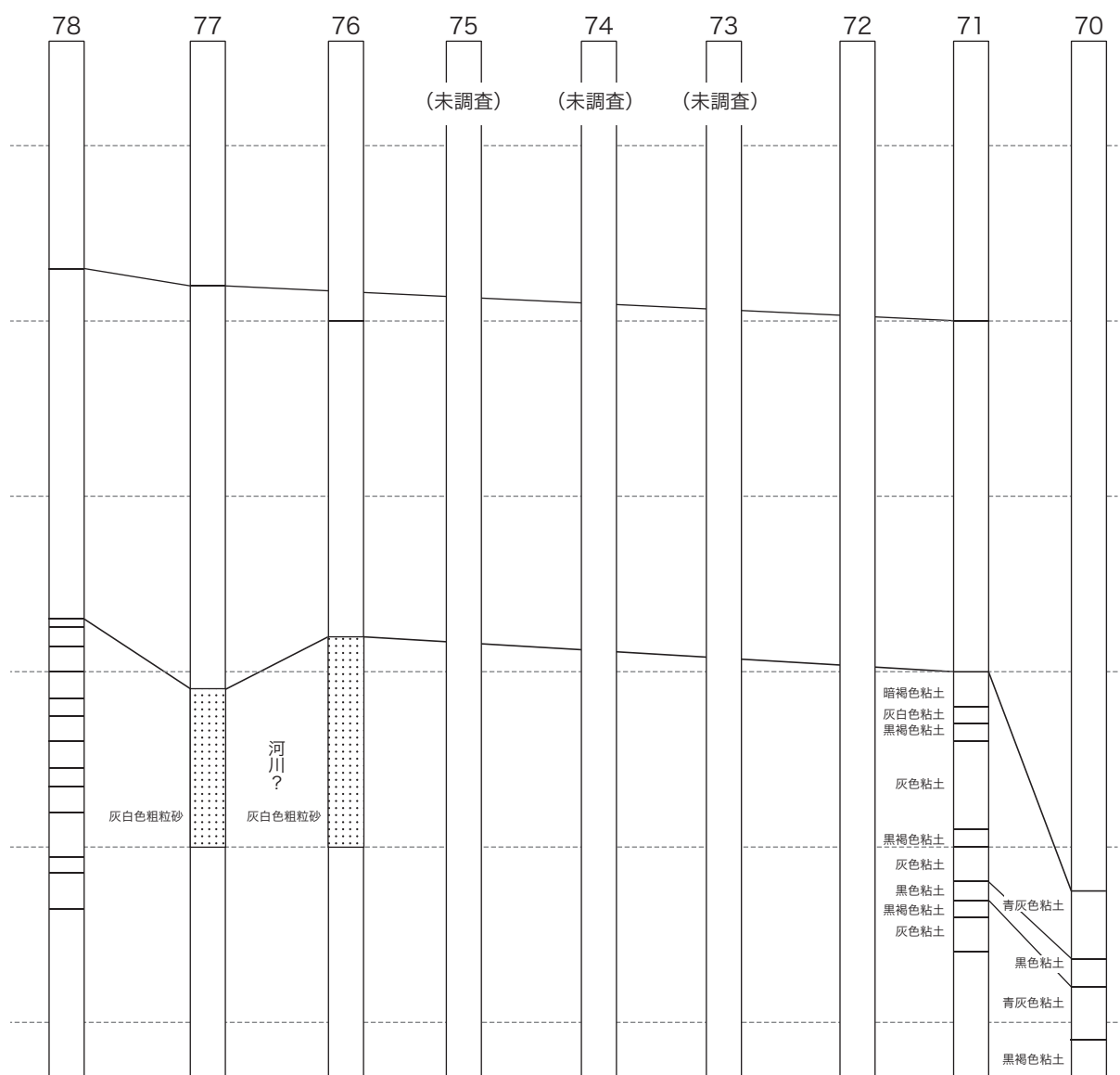
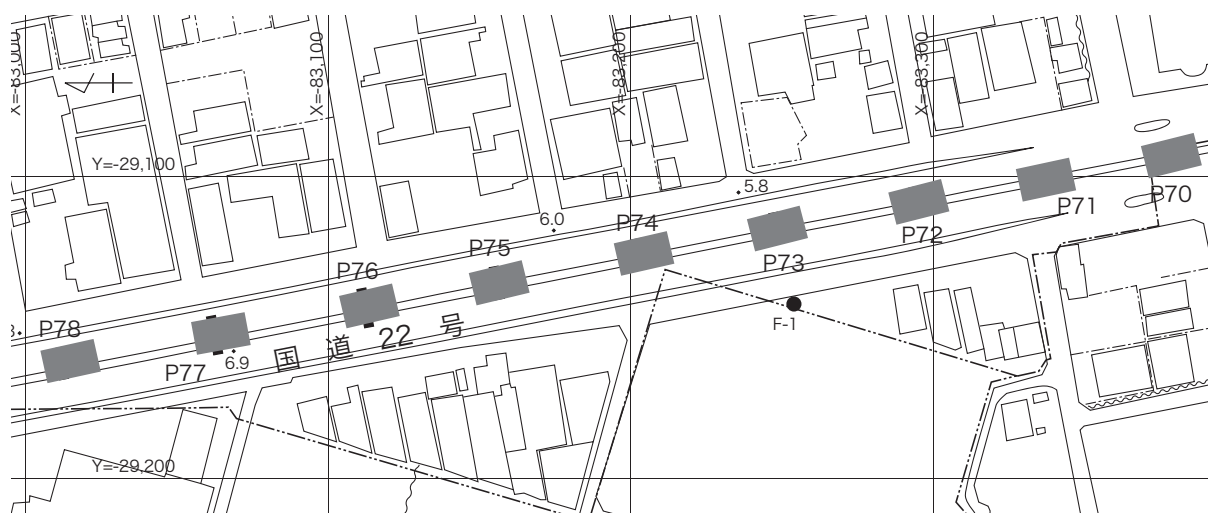
道路面（標高約 6.0 m）から深さ約 3.0 m（標高約 3.0 m）までを一次掘削として機械掘削後、二次掘削としての機械掘削時に県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。

後背地

層序は上位から、青灰色粘土（約 40cm）、黒色粘土（約 15cm）、青灰色粘土（約 30cm）で、黒褐色粘土に達する。なお、黒色粘土層の上面の標高は 2.0 ～ 2.5 m とみられる。明確な遺物包含層、遺構とも認められず、遺物も出土しなかった。



第248図 調査区土層断面柱状図Ⅰ (縦1:40/横1:2,500)



第249図 調査区土層断面柱状図2 (縦1:40/横1:2,500)

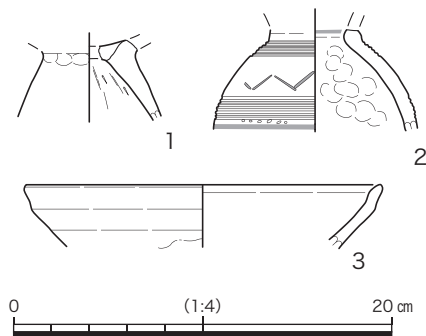
第3章 採集遺物の概要

P86工区

採集遺物として少量の土師器（1・2）と中世陶器（3）がある。

1は台付甕で、粘土塊による栓を充填して底部を成形する。2は小型のパレス壺で、体部上半の文様は上位からクシ直線文、ハケ列点文による山形文、クシ直線文、ヘラ列点文によって構成され、山形文上、体部下半を赤彩する。色調は黄橙色で、通有のパレス壺とは特徴を異にする。土師器はいずれも表面の風化が進行していることから、周辺から流入した可能性がある。

3は古瀬戸後IV期の平碗。



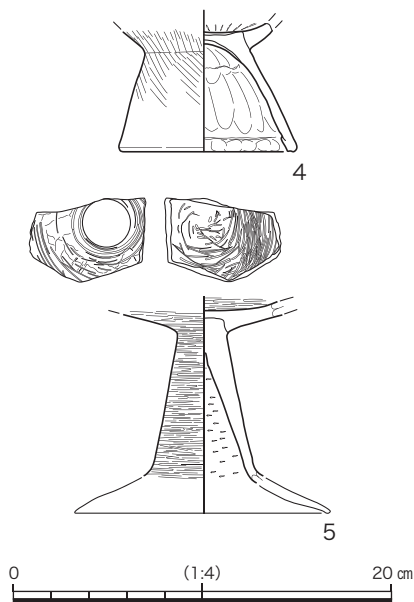
第250図 P86工区採集遺物実測図（1:4）

周辺からの流入

P84工区

採集遺物として少量の土師器（4・5）がある。

4はS字甕で、脚端部を内面に折り返す特徴からB類またはC類に対比される。底部内外面に砂礫を補充する。5は精製の無透孔屈折脚高杯で、硬質に近い状態までに固く焼き締められる。色調は赤褐色を呈する。杯部と脚部の接合は、脚頂部の上面と側面に粘土を付加して杯部を成形する製作手法による。脚部外面と杯部内外面にいずれも幅1mmの細かい沈線状のヨコミガキを施し、脚部内面にはケズリを施す。形態・成形・調整手法など布留式の精製高杯の諸属性を充足する要素が多い。



第251図 P84工区採集遺物実測図（1:4）

精製高杯

布留式



写真97 布留式高杯（5）の製作技法

1：杯部と脚部の接合方法 2：脚柱状部のヨコミガキ 3：杯底部外面のヨコミガキ

P83工区

採集遺物は多く、弥生時代後期の高杯（72）がわずかに含まれるも、その他の大多数は土師器（6～71・73～97）である。

SU03として採集した遺物（6～42）として、甕、器台、高杯、鉢、壺がある。

6は口縁部を受口状とする甕。7・8は肉厚で安定した脚台であること、内外面の調整などから、山中式から連続する伝統的な台付甕と思われる。9～15はS字甕で、9はA類古段階、10・11はA類新段階、12・13はB類新段階にそれぞれ対応する。14・15は底部内外面に砂粒を補充する。

16は受部を有段とする器台（高杯）で、月影式に系譜する個体と思われる。17～22は高杯で、杯部の形状には碗形のもの（17）、杯部下端の稜が消失したもの（18）がある。23は小型の鉢で、24についてもやや不確かながら、口縁部を小さな片口状とした鉢状の器形を推定した。さらに24の体部内面には線刻がある。線刻はごく細い線による描出で、図文は不明である。25は壺の体部破片で、ハケ調整後に線刻を加える。線刻は部分的に確認されるのみで、描出された図文は不明である。26～31はパレス壺で、27・28は体部上半にクシ直線文と山形文を交互に配する。ただし、27の山形文はハケ列点で赤彩を重ねる一方、28の山形文はヘラによる描出で赤彩を重ねない点において異なる。32は小型の二重口縁加飾壺で、径4～5mmの円形浮文を付す。38は頸部に断面三角形の突帯を付す広口壺で、口縁部内面をごく曖昧な段状として、ミガキ調整を施す。

SU01として採集した遺物（43～66）として、甕、鉢、高杯、器台、壺がある。

43はS字甕に類似するが、調整手法、胎土の選択性などからS字甕とは明確に分離される。口縁部は強いヨコナデによって有段状に近い形状となる。体部内面にはケズリ調整が施され、頸部内面には稜が生じるまでになる。素地に混和される砂粒は通有のS字甕と比較して少なく、赤褐色に焼成される。46・47は同一個体の可能性がある。47の脚部外面の調整は細筋のタタキ調整としたが、不明確である。48～52はS字甕で、大型品（48～51）と小型品（52）の存在が特徴的である。48がB類古段階、49がB類新段階に対応する。51は焼成後底部穿孔としたが、やや不確実である。

54は口縁部が内彎する長頸壺とした。口縁部外面の文様は貝殻腹縁による刺突とヘラ直線文による構成で、脚付の器種である可能性がある。55は杯部下半を碗形、杯部上半を有段状とする高杯で、器壁が薄く口縁部先端を細く仕上げる精製品である。外面には横方向のミガキに斜方向のミガキを重ねる。器形については、月影式の高杯との系譜関係が考慮される。58～60は器台。58は脚部外面に線刻がある。線刻は透孔によって分割された空間に異なった図文を配するもので、さらにそれぞれの図文を連絡する線も認められる。図文の内容、意味については不明確である。59は受部と脚部を有段状とし、擬凹線による装飾を施す器台で、月影式に対比される。ただし、受部の推定復原にはやや難がある。

壺（61～66）には、広口壺（61・63・64）、短頸壺（62）、パレス壺（65）などがある。61は体部内面に粘土を薄く貼り付けて補強している。

SU02として採集した遺物（43～66）として、壺、高杯、甕がある。

壺（67～71）には、直口壺（67）、内彎短頸壺（68～70）、広口壺（71）がある。直口壺はヨコミガキを施した精製品であるが、ハケ調整が表面化する部分も多い。

月影式の器台

線刻片口付？鉢

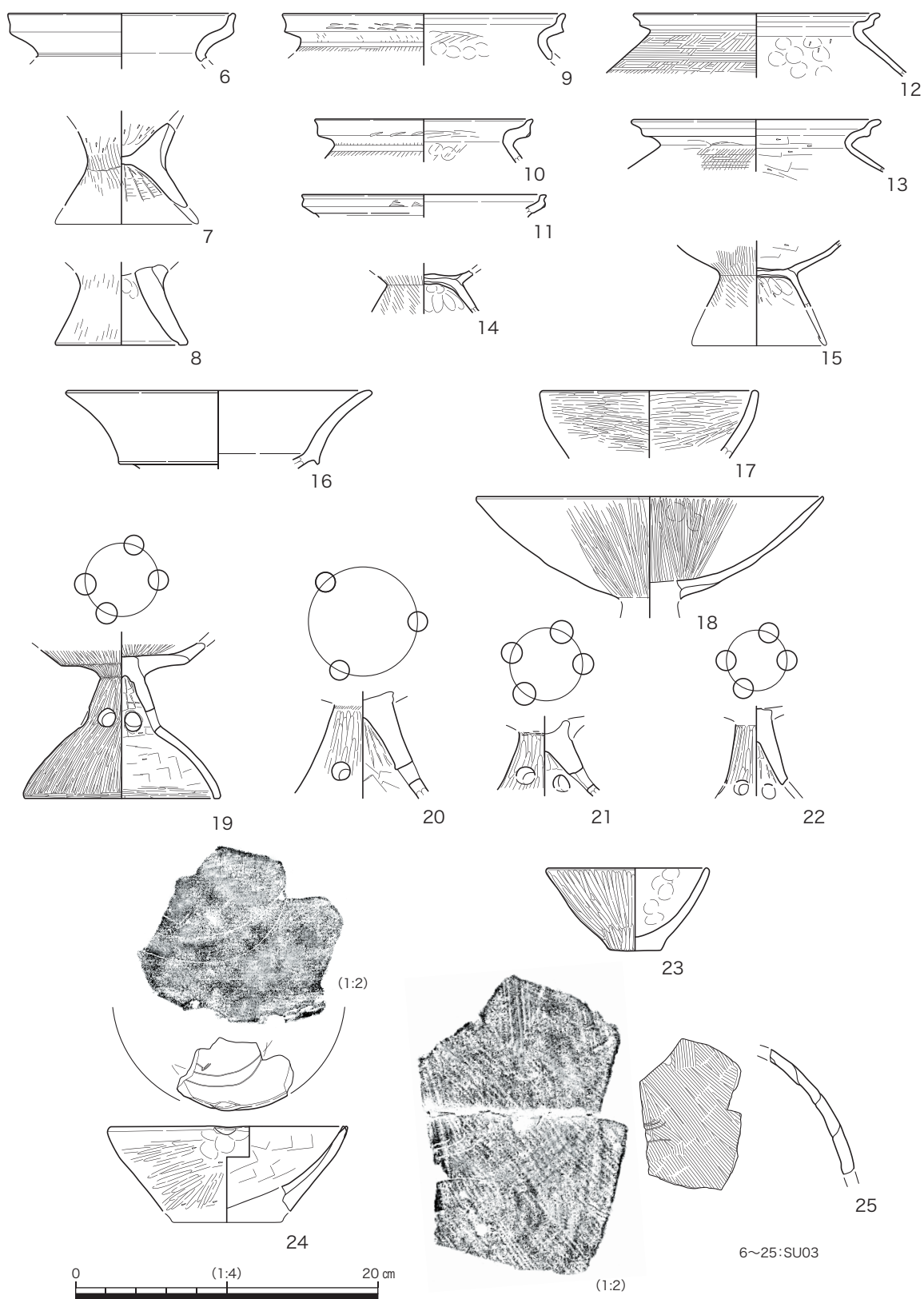
S字甕類似甕

大型品と小型品

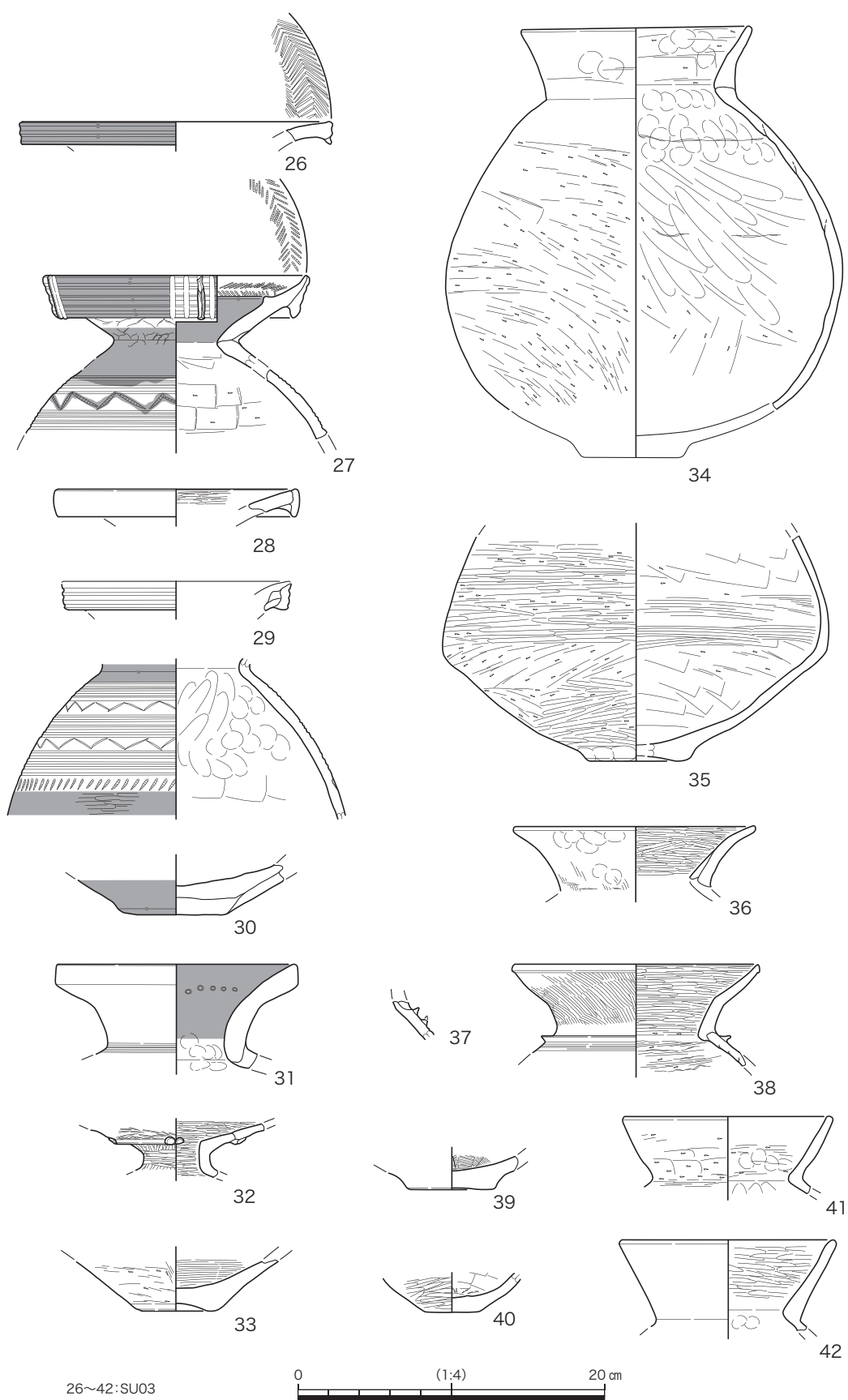
焼成後穿孔？

線刻がある器台

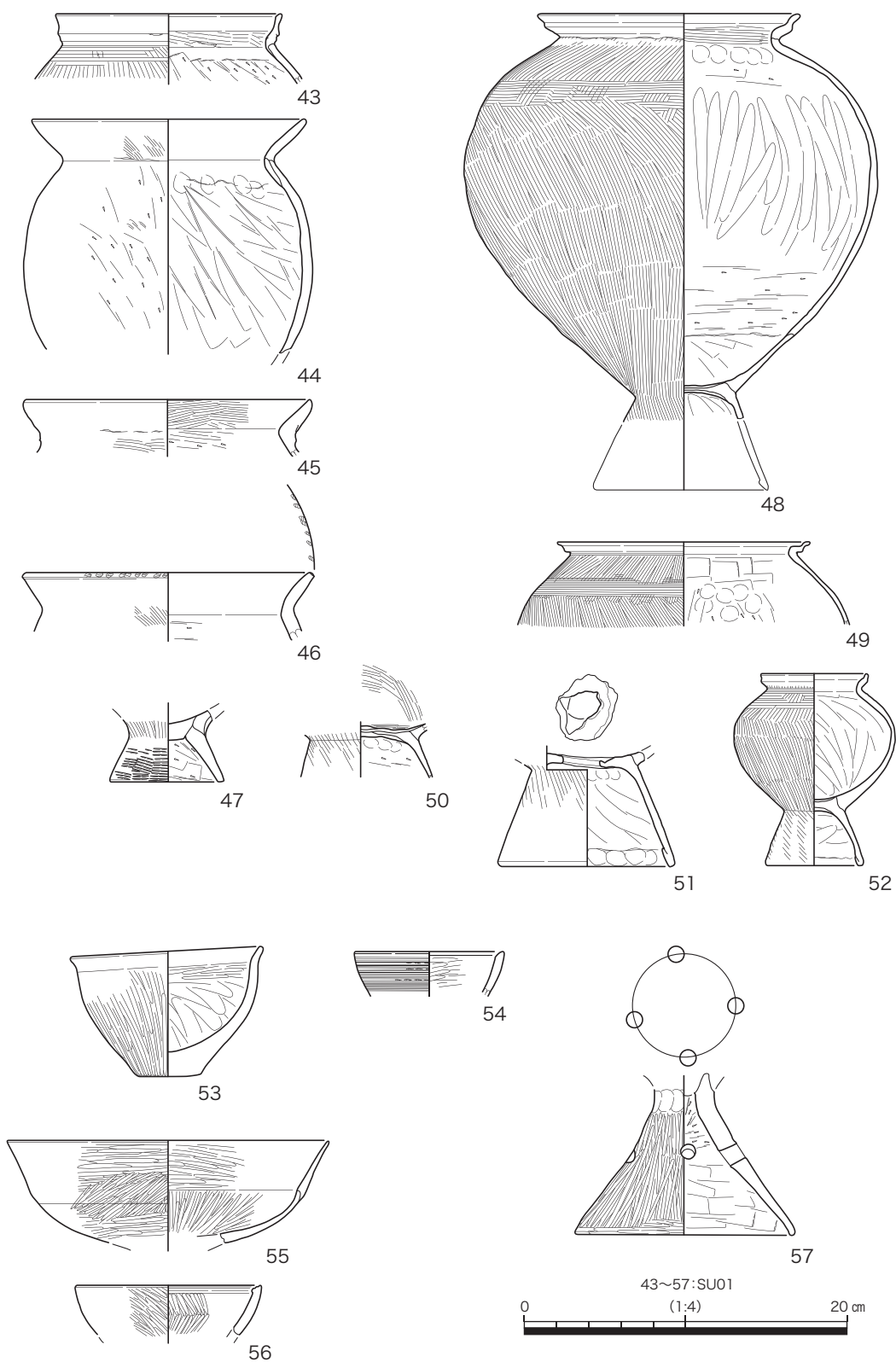
月影式の器台



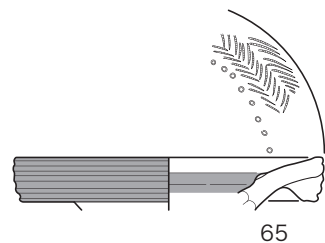
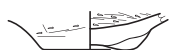
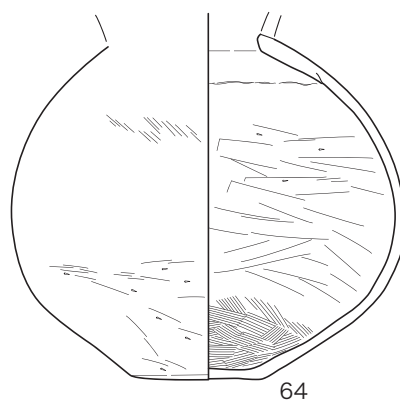
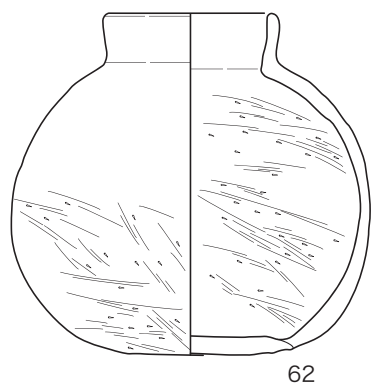
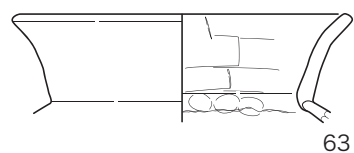
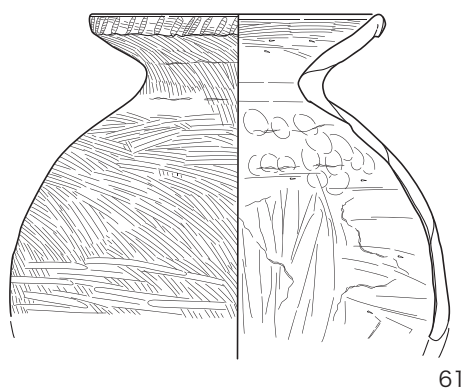
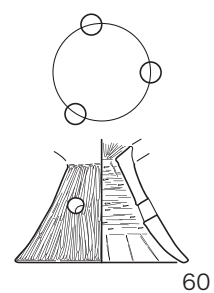
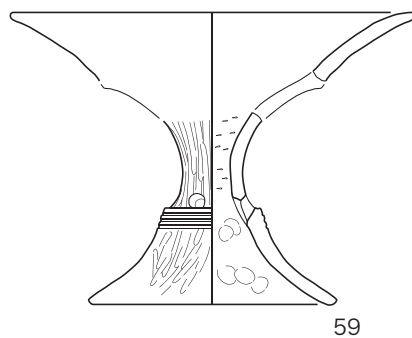
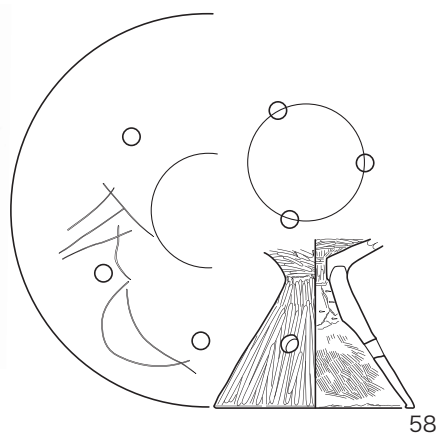
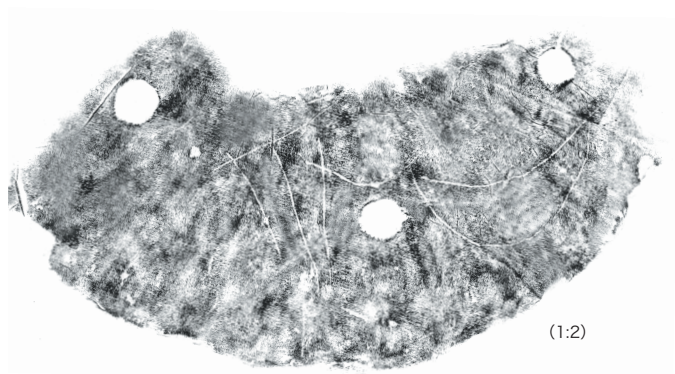
第252図 P83工区採集遺物実測図1 (1:4)



第253図 P83工区採集遺物実測図2 (1:4)

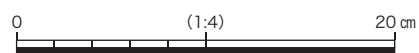


第254図 P83工区採集遺物実測図3 (1:4)

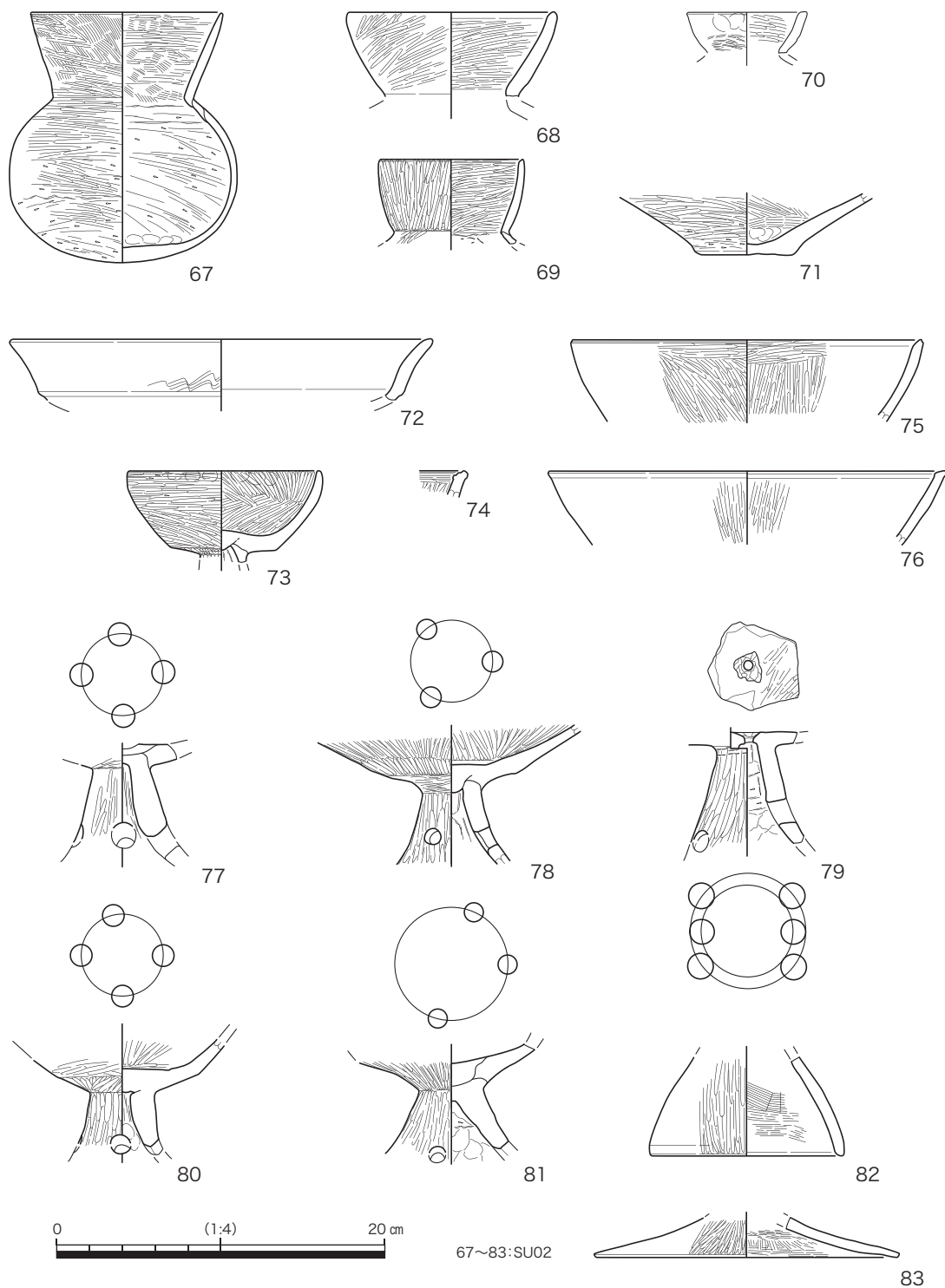


58~66:SU01

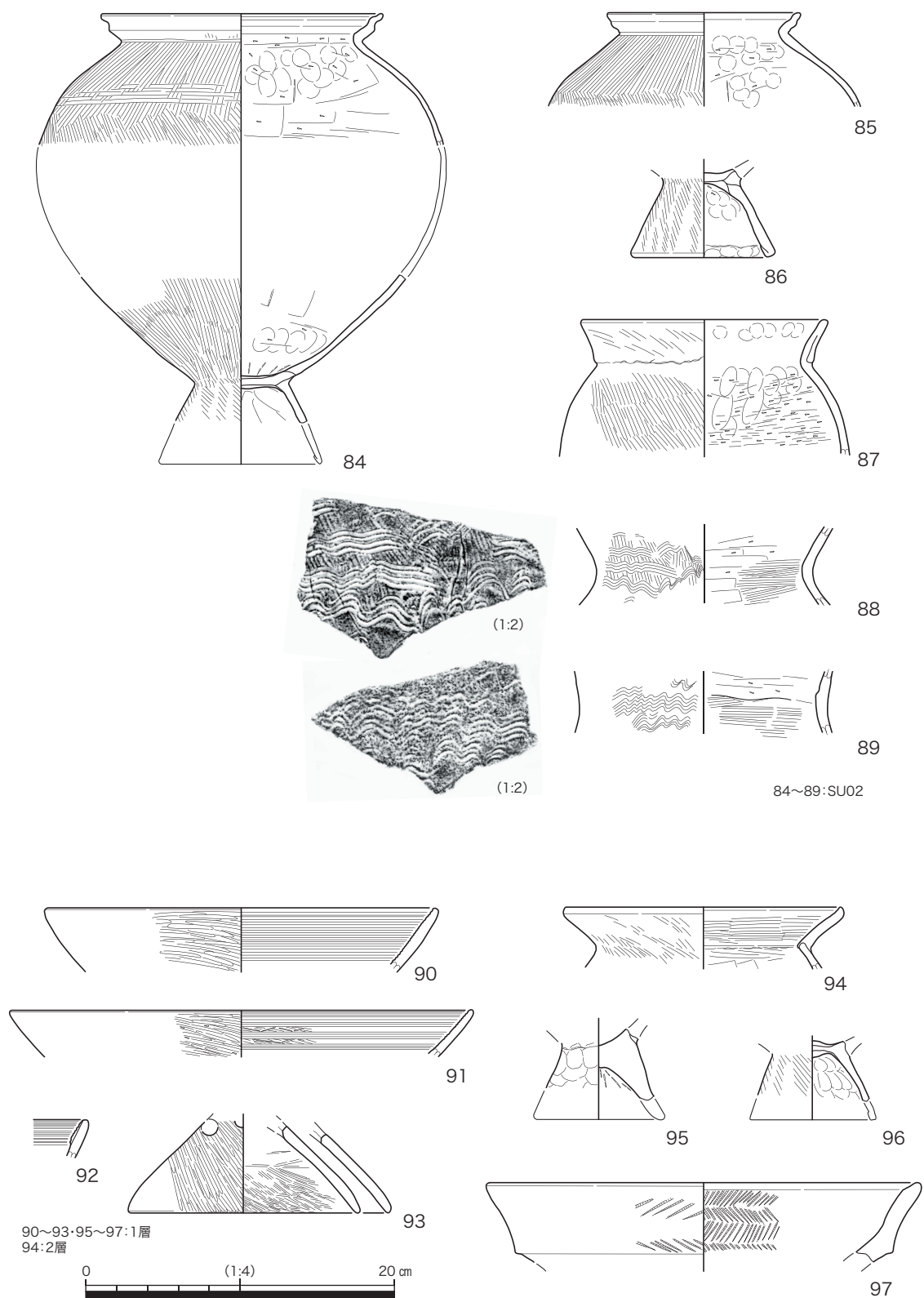
66



第255図 P83工区採集遺物実測図4 (1:4)



第256図 P83工区採集遺物実測図5 (1:4)



第257図 P83工区採集遺物実測図6 (1:4)



19



23



24



25



34



35



48



51

写真98 P83工区採集遺物 1



52



53



57



58



58



58



59



60

写真99 P83工区採集遺物2



61



62



64



67



73



87



88



89

写真100 P83工区採集遺物3

72 は山中式に対比される有段高杯である。段の成形は曖昧で、波状文の描出はごく弱い。全体に器表面の風化が著しい。73・74 は有稜低脚高杯の杯部、83 はその脚部とした。79 は脚部上段に1孔、下段に2孔の透孔を一对として穿孔する。焼成後底部穿孔とした。

山中式高杯

甕 (84～89) は、S字甕以外に特徴的な型式が認められる。S字甕 (84～86) は、84 がB類新段階、85 がD類古段階に対応する。87 は口縁部の折り返し、内面のケズリが特徴的な甕である。伝統的な器種の範疇には属さないが、系譜関係を明確に指摘することも難しい。88・89 は、一定幅の櫛描文施文後、施文原体を器表面から離脱させる、いわゆる「中部高地型櫛描文」を施した箱清水式の甕である。頸部の屈曲の度合い、色調から別個体と判断した。櫛描文は波状文のみで簾状文は確認できない。

折り返し口縁甕

箱清水式の甕

その他 90～97 は、SU01～03 を検出した上位の層において採集した遺物である。90～92 は杯部内面を加飾する有段高杯で、文様は 90 がへう直線文、91 がへう直線文とへう山形文、92 がクシ直線文による構成である。97 は柳ヶ坪型壺で、ハケ列点を羽状に施す。

P82工区

採集遺物は多く、そのいずれもが土師器 (98～144) である。

SU01 Aとして採集した遺物 (98～112) として、甕、壺、高杯、器台がある。

甕 (98～102) は、多様な諸型式によって構成され、S字甕は含まれない。98 は口縁部を受口状とする甕で、ハケ直線文、ハケ列点文によって加飾される。

壺 (103～109) は、内彎短頸壺 (103)、広口壺 (109) などがある。103 は外面と口縁部内面を赤彩する内彎短頸壺で、口縁部外面を擬凹線、体部上半外面をクシ直線文、へう列点文によって加飾する。109 は大型で、器壁も厚い。著しく萎縮したかのような口縁部は、剥離した擬口縁状の部分を、連続する敲打、研磨によって再加工した見かけ上の口縁部である。頸部に突帯を付し、竹管状工具による刺突を加える。体部上半はクシ直線文、クシ列点文を交互に配し、竹管状工具による刺突列を文様帯の下端に配する。素地には多量の砂粒、細礫を混和する。104 は脚付壺の脚部としたが、器台の可能性もある。

大型壺

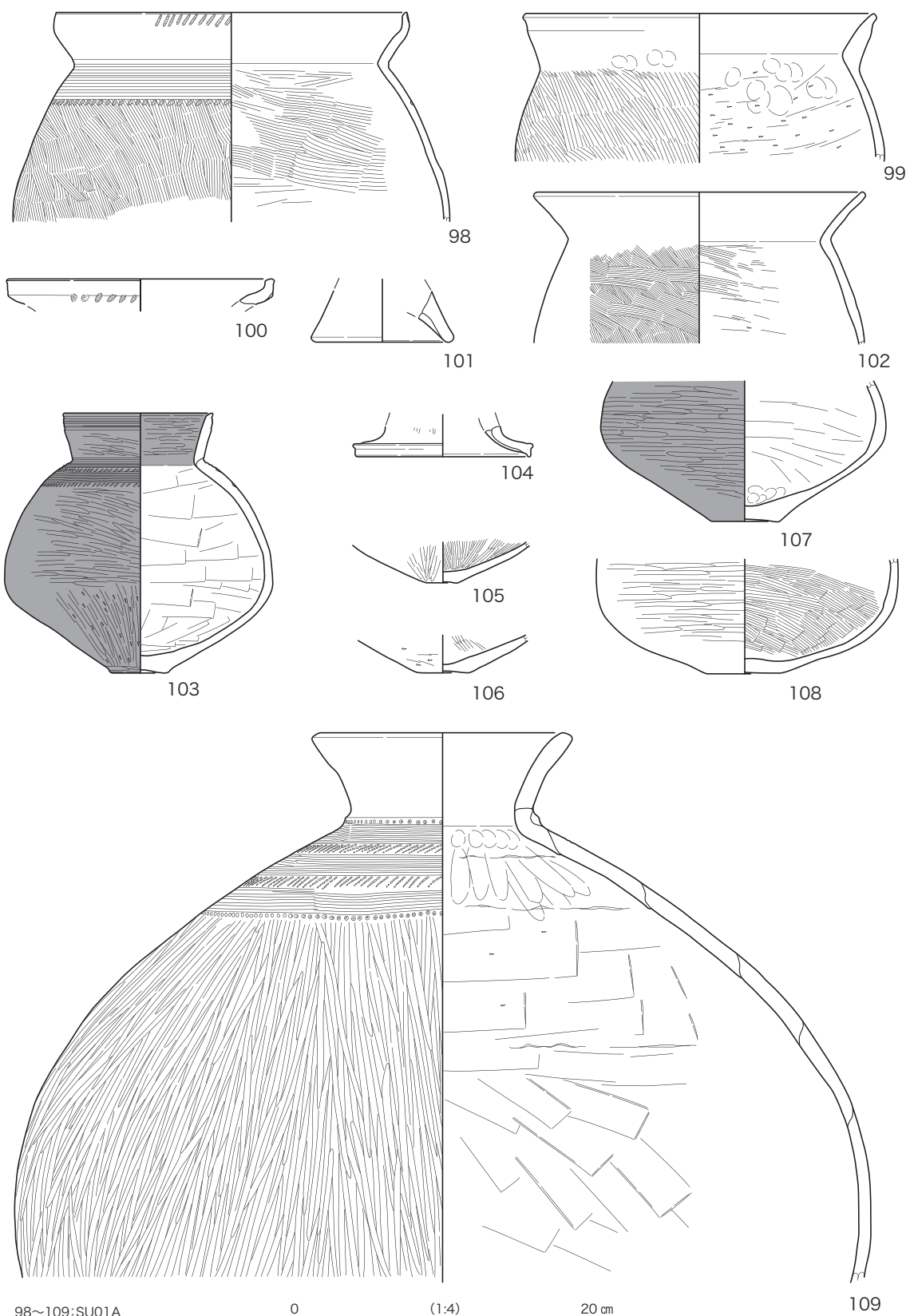
口縁部の再加工

高杯 (110～113) は、有段高杯 (110～112) と椀形高杯 (113) がある。110 は器壁が薄く、良質な素地によって製作した精製品である。椀形高杯とした 113 も器壁がごく薄く、砂粒をほとんど含まない灰白色の良質な素地によって製作された精製品で、口縁部外面を擬凹線、円形スタンプ文によって加飾する。114 は有孔器台。

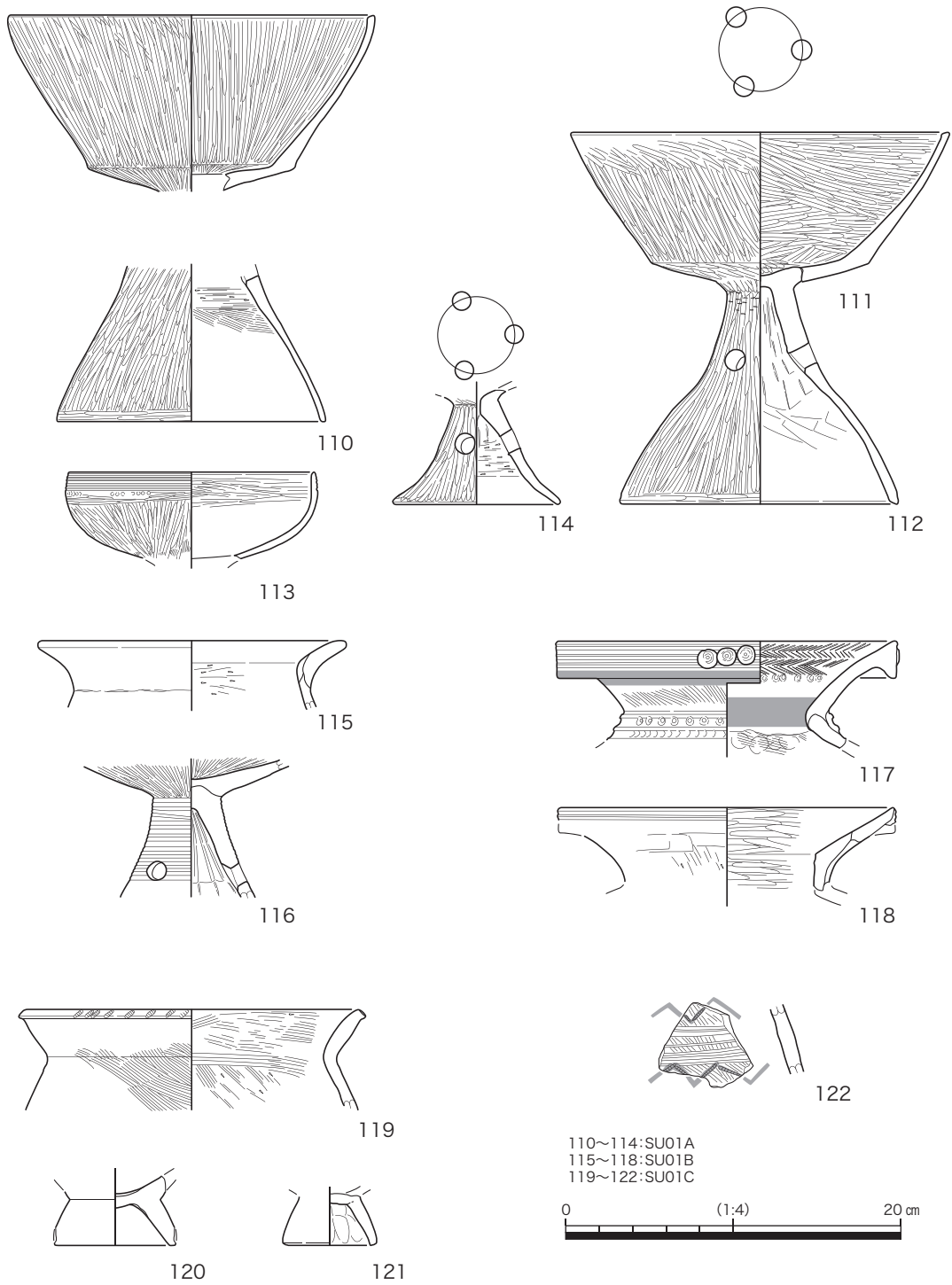
精製椀形高杯

SU01 B (115～118)、SU01 C (119～121)、SU02 (123～125)、SU03 (126～137)、SU04 (138・139) などにおいてそれぞれ採集した遺物は全体として少量である。

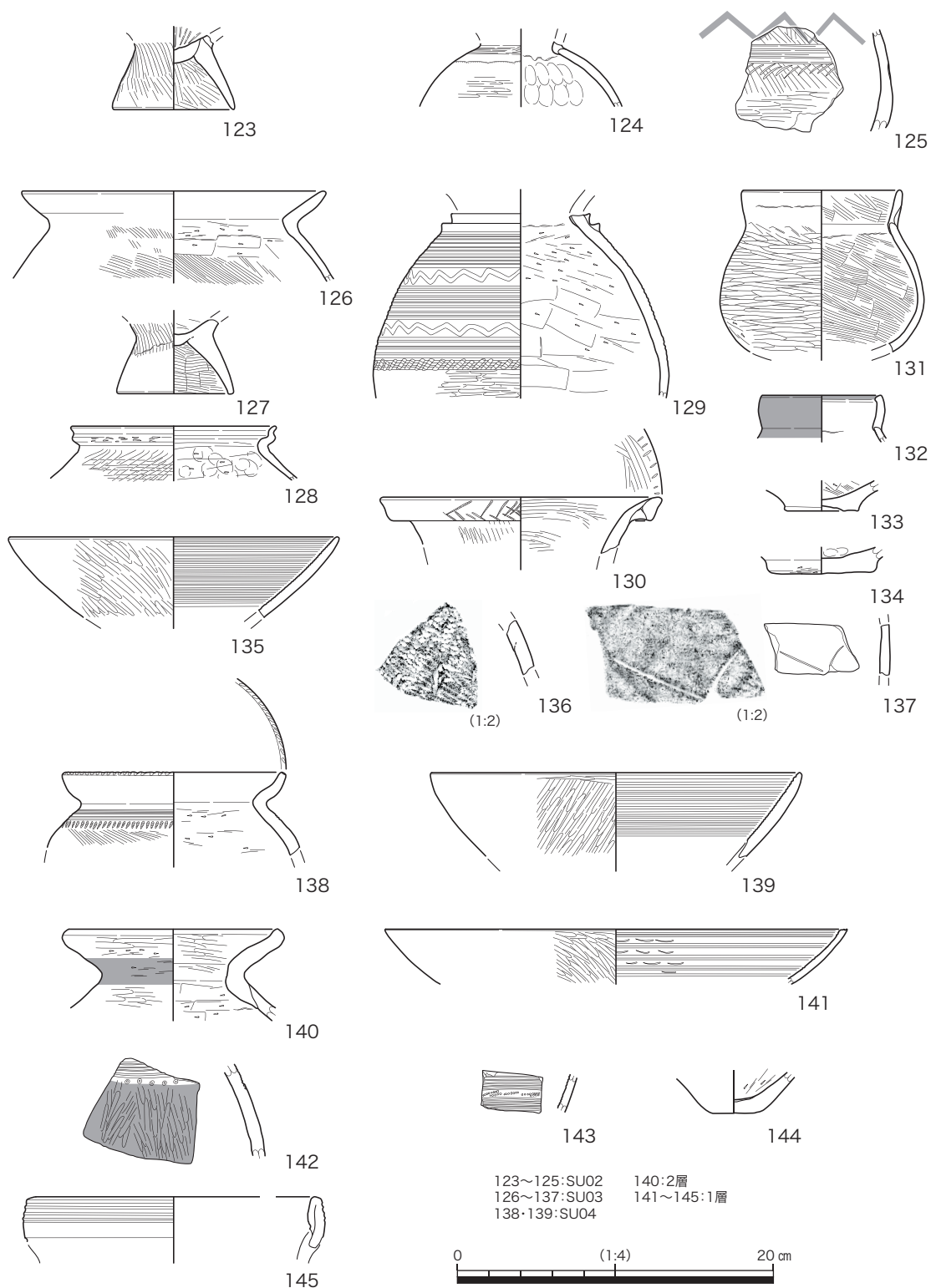
117 はパレス壺で、擬凹線上に円形浮文、頸部上に突帯を付す。円形浮文上、頸部の突帯上、口縁部内面の文様帯の下端には竹管状工具による刺突を密に加える。129 はパレス壺であるが、色調は橙褐色で、赤彩しない。砂粒も多く混入する。頸部には断面三角形の突帯を付す。体部上半の文様帯にはクシ直線文、へう山形文を交互に配し、下端にはハケ列点文を加える。136 は縄文を施した壺で、東海地方東部以東との関係を示唆する個体と思われる。137 は線刻を確認できるが、器種、線刻の内容は不明である。139・140 は杯部内面を加飾する有段高杯で、文様構成は 139 がクシ直線文、140 がクシ直線文とへう連弧文による。143 は有稜低脚高杯の杯部で、クシ直線文とクシ列点文が確認できる。145 は擬凹線を施す器種であるが、器種、部位を正確に特定しえない。



第258図 P82工区採集遺物実測図1



第259図 P82工区採集遺物実測図2 (1:4)



第260図 P82工区採集遺物実測図3 (1:4)



98



99



103



107



109

写真101 P82工区採集遺物1



110



111



110



112



113



114



129



131

写真102 P82工区採集遺物2

P81工区

採集遺物は相対的に少ない。そのいずれもが土師器（146～158）である。

下層において採集した遺物（146～149）として、高杯（146～148）、広口壺（149）がある。

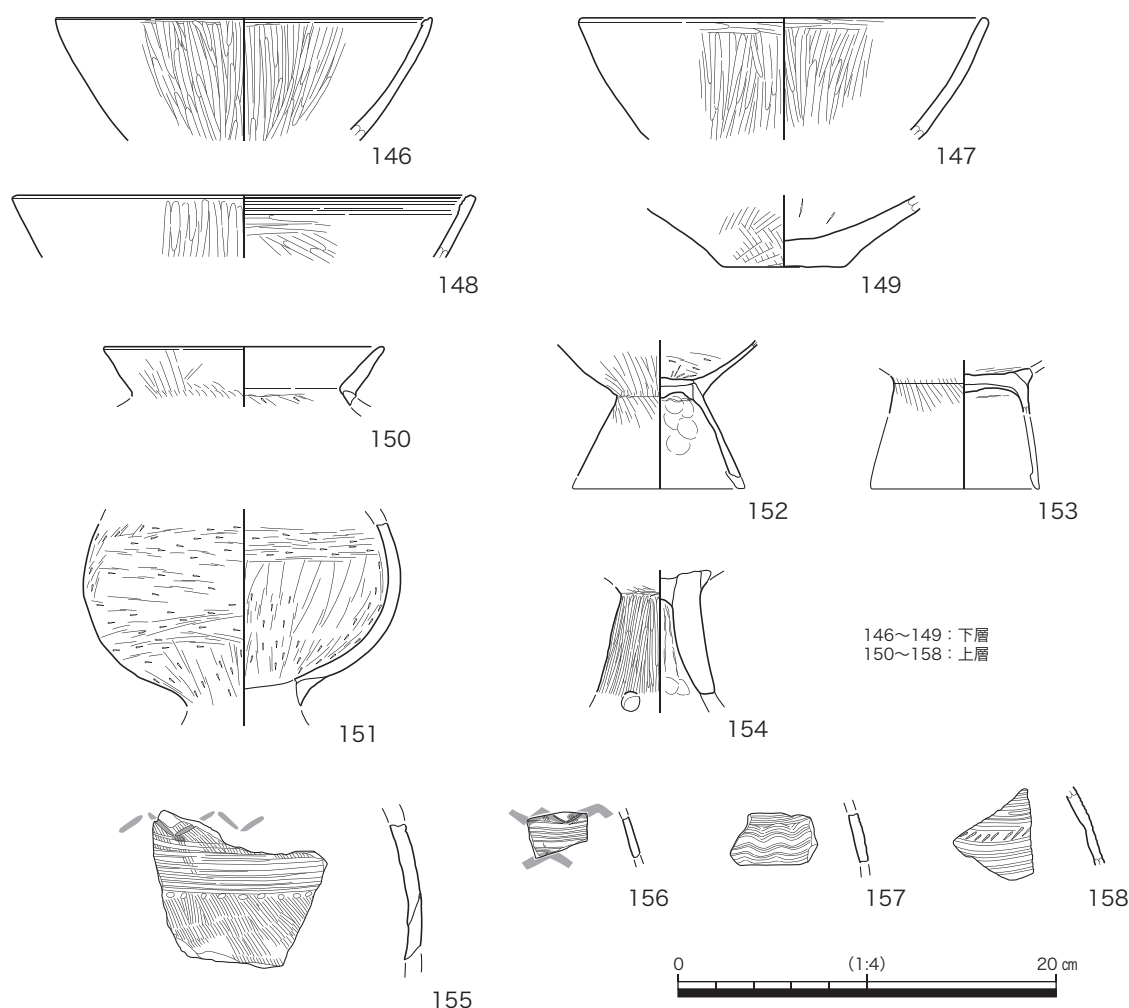
高杯は有段高杯のみが確認される。146 は口縁部先端に内傾する斜面を作出するが、造作はやや曖昧である。147 は口縁部先端を単純に処理するのみ。148 は口縁部内面を肥厚させて文様帯とするが、文様帯には雑なハケ直線文が施される。

上層において採集した遺物（150～158）として、甕（150～153）、高杯（154）、壺（155～158）がある。

甕は、S字甕（152・153）とS字甕以外の台付甕（150・151）がある。152の底部外面には砂礫ではなく粘土が補充され、底部内面には砂粒がわずかに混和される程度である。153も底部内外面には砂礫の混和が少ない粘土が補充される。

壺はパレス壺（155・156）とパレス壺以外の加飾壺（157・158）がある。155は上位からヘラ山形文、ハケ直線文、ヘラ列点文が配され、156はハケ列点による山形文とクシ直線文が交互に配される。それぞれの山形文の周囲は赤彩される。157はクシ直線文と波状文、158はクシ直線文とハケ列点文が施される。

粘土の補充



第261図 P81工区採集遺物実測図（1:4）

P80工区

採集遺物はやや多く、そのほとんどをSU01として採集した(159～200)。採集した遺物として甕(159～174)、蓋?(175)、壺(176～182)、高杯(183～197・199・200)、器台(198)がある。

甕は、S字甕以外の台付甕(159～163)とS字甕(164～174)がある。S字甕は164・165がA類新段階、166がB類古段階、167・168がB類新段階、169・170がC類新段階にそれぞれ対応する。173・174は小型のS字甕で、型式の比定は難しい。173は右下がりの斜方向のハケ、断続的なヨコハケが独特である。

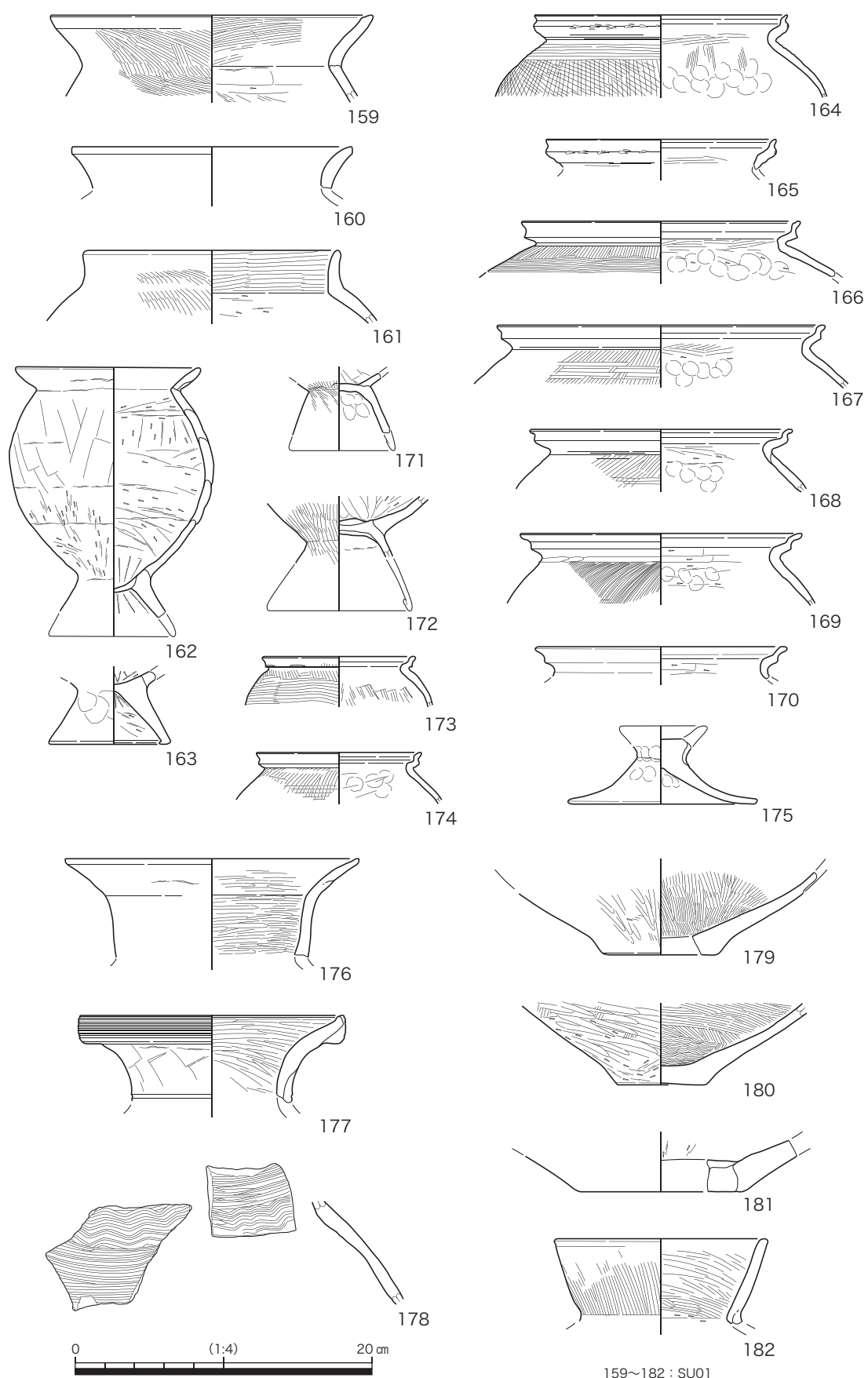
175は蓋としたが、同時期の当地域には組成しない器種であることから、器種の特定にはやや不安が残る。壺は、器形や文様構成について知りうる内容が少ない。

高杯は、有段高杯(183～194)、有稜低脚高杯(195・196)、碗形高杯(197)がある。有段高杯は杯部にヨコミガキを施す頻度が高い。187は杯部が碗形に近い形状として復原され、杯部下端の段もほとんど認められない。ミガキは幅広で、方向が一定しない。189は杯部内面をクシ直線文によって加飾する。190は長い細身の脚部、191は内彎が顕著でない円錐形の脚部をそれぞれ特徴とする。195・196は杯部外面にへう直線文、クシ刺突文を施す。199・200は高杯としたが、器種の特定は不確実である。また、これらのみ時期が降る可能性もある。

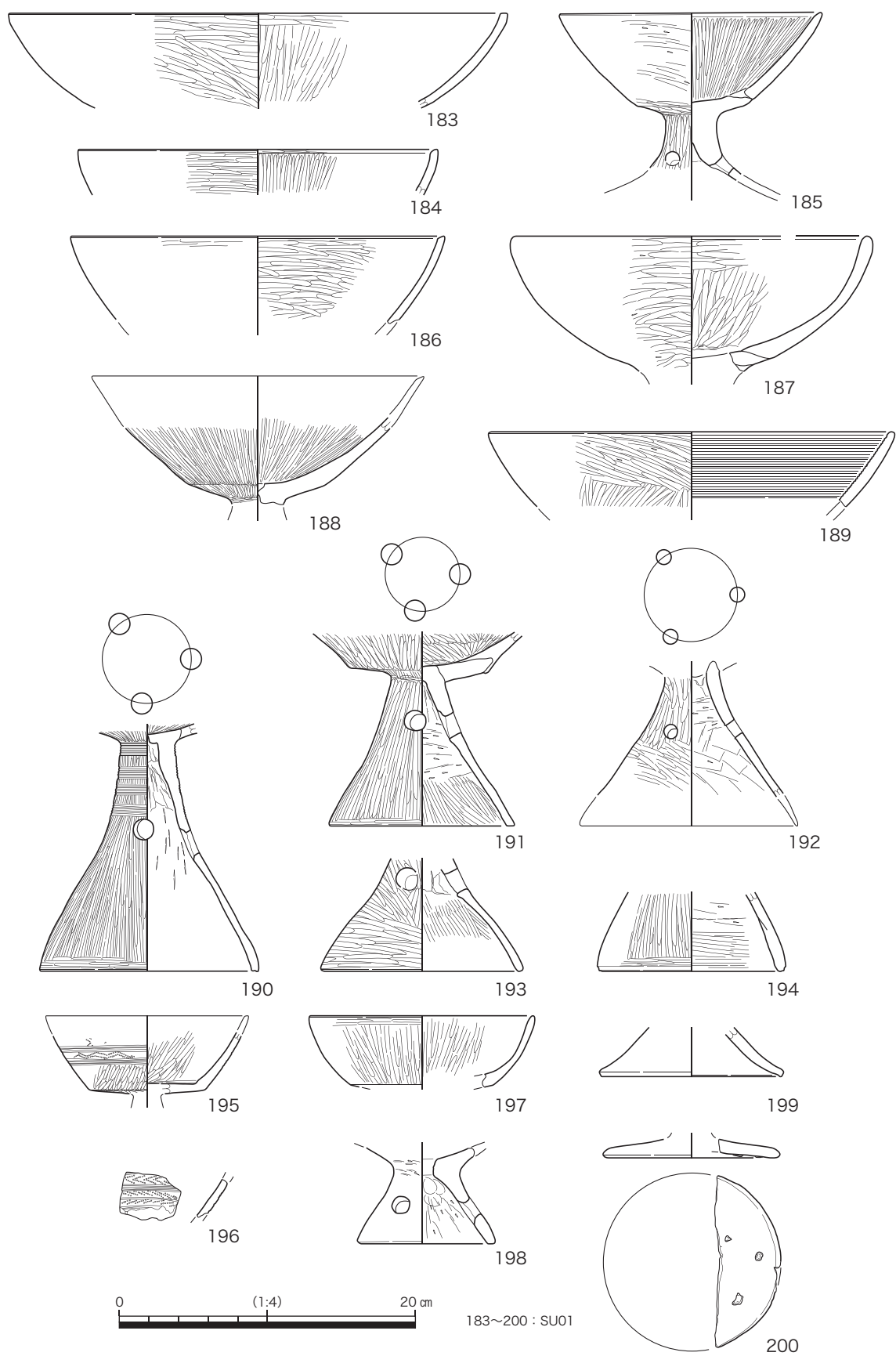
小型S字甕



写真103 P80工区採集遺物



第262図 P80工区採集遺物実測図1 (1:4)



第263図 P80工区採集遺物実測図2 (1:4)

第4章 考察

(1) 出土土器の帰属時期

本遺跡の出土土器は、立会調査時に採集した遺物であるので、残念ながら集合資料として扱わざるをえない。そこで、既往の編年研究の成果によりながら、出土土器が帰属するおよその時期を出土地点に応じて示すこととする。この場合、主として時期決定が容易なS字甕と有段高杯の型式を重視し、適宜、他の特徴的な器種を参照する。

山中式の高杯(72)は、1点のみの出土で、器面の状態からは、周辺から流入した可能性も考えられるので、例外的な存在として考慮しない。また、P 83 工区SU02として採集したS字甕D類(85)は、出土土器が帰属する時期の下限が松河戸Ⅰ式前半であることを示す。

S字甕D類に加えて、同じくP 83 工区において採集した直口壺(67)、柳ヶ坪型壺(97)も同様に、松河戸Ⅰ式前半、あるいはその前段階の廻間Ⅲ式後半に帰属する。直口壺はSU02、柳ヶ坪型壺はSU01～03の上位においてそれぞれ採集していることから、S字甕D類と直口壺を含むSU02には上層の土器群が混在していると考えられる。また、「五日市場」交差点を介したP84 工区においては布留式の高杯(5)が採集されていることから、P 83・84 工区付近には廻間Ⅲ式後半～松河戸Ⅰ式前半の遺構・遺物が一定程度分布することが予測される。

廻間Ⅲ式後半～松河戸Ⅰ式前半に帰属する一群を除外すると、P 83 工区には、A類新段階～B類新段階までのS字甕(9～15、48～52、84)が確認されつつ、S字甕以外の甕(6～8、43～47)も散見されることから、出土土器の帰属時期は、廻間Ⅰ～Ⅱ式をほぼ充足するものと思われる。より詳細には、S字甕B類古段階(48)、ハケ、ヘラによる山形文を描出したパレス壺(30)、有段高杯(19)など、およそ廻間Ⅱ式前半に相当する一群は、個体の完存率が相対的に高く、出土量も安定することから、P 83 工区出土土器は、廻間Ⅱ式前半に帰属する個体を中心として構成されると理解したい。

一方、P 82 工区SU01には、S字甕が含まれず、S字甕以外の多様な形式の甕(98～102)のみが組成することから、およそ廻間Ⅰ式前半に相当すると理解して大過ない。有段高杯については、脚部が円錐形に近いもの(110)と、脚部下半が顕著に内彎する長脚のもの(112)が共存し、杯底部は外傾するもの(110)と平坦に近いもの(111)がある。これらの器種の組成、型式の特徴から、SU01出土土器は、廻間Ⅰ式0段階に相当する清洲市廻間遺跡SB02出土土器に後出し、廻間Ⅰ式2段階に相当する師勝町能田旭遺跡溝状遺構出土土器に先行する、つまり廻間Ⅰ式1段階に相当する廻間遺跡SB75出土土器に対比されるであろう(第264図)。他のP 82 工区出土土器、さらにP 81 工区出土土器は、出土量が安定しないが、P 83 工区出土土器と同様に、およそ廻間Ⅰ～Ⅱ式を充足する土器群と理解しておきたい。

P 80 工区SU01出土土器は、A類新段階～C類新段階に相当する各段階のS字甕(164～174)が含まれつつ、S字甕以外の多様な甕(159～163)も一定量組成することから、

集合資料

弥生時代後期

廻間Ⅲ式後半～

松河戸Ⅰ式前半

P 83 工区

P 82 工区

P 80 工区

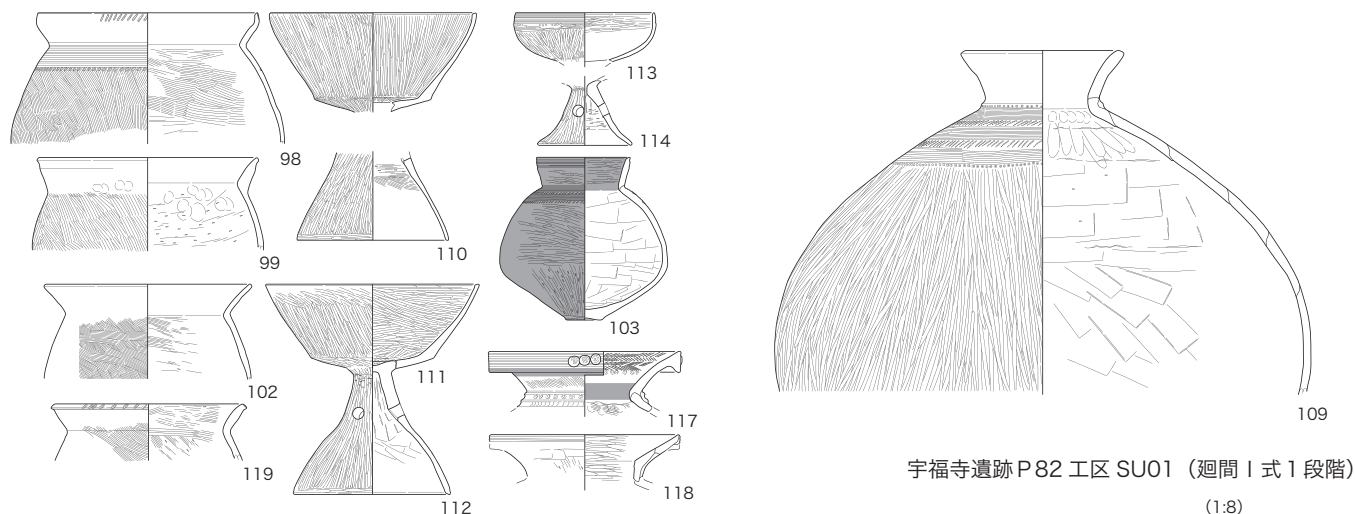
廻間Ⅰ～Ⅲ式の各時期の土器が混在していることは明らかである。ただ傾向として、S字甕以外の台付甕(162)、脚部が円錐形に近い有段高杯(190・191)などの完存率が高いことを重視するなら、P 80 工区出土土器は廻間Ⅰ式0～Ⅰ段階に帰属する個体を主として構成されていることは指摘できる。

小結

以上から、本遺跡出土土器は主として廻間Ⅰ～Ⅲ式を充足しつつ、一部には松河戸Ⅰ式の土器が混在する集合資料として理解される。より詳細には、P 82 工区 SU01 出土土器を廻間Ⅰ式Ⅰ段階の一括資料に準じた資料、P 83 工区出土土器が廻間Ⅱ式前半、P 80 工区出土土器を廻間Ⅰ式前半の土器を相対的に多く含む集合資料、P 83・84 工区の上層において出土する一群を廻間Ⅲ式後半～松河戸Ⅰ式前半の集合資料として把握しておきたい(第23表)。

第23表 編年対照表

山中Ⅱ式	1 2 3	P83 P82 P81 P80
廻間Ⅰ式	0 1 2 3 4	SU01
廻間Ⅱ式	1 2 3 4	
廻間Ⅲ式	1 2 3 4	
松河戸Ⅰ式	前半 後半	P83・P84 上層



第264図 廻間Ⅰ式0～Ⅰ段階の土器

(2) 出土土器の組成

採集遺物は出土状況から完全に遊離した資料である。そこで、遺構の性格、遺跡の特質の推定に反映させる目的で出土量の計測を実施した（第 24・25 表・第 265・266 図）。

器種は甕、壺、高杯、器台、鉢に分類し、さらに甕は S 字甕と S 字甕以外の甕に区分してそれぞれ出土量を計測した。計測については、口縁部計測法、底（脚・台）部計測法、個体識別法を併用し、計測結果を相互に比較することとした。なお、個体識別は図化を目的として抽出した遺物を対象とし、器種の特定に難がある個体は除外した。

遺跡全体を通した場合、出土量は甕、壺、高杯・器台・鉢の三者がそれぞれ 3～4 割の比率を示し、器種の著しい偏向性は認められない。これに比して、著しい器種の偏向性を示すのが P 82 工区である。P 82 工区 SU01・02 においてはいずれの計測法においても壺が卓越し、SU01 の底部計測法を実施した結果は、壺が 7 割以上の高率を示した。このとき注意されるのが大型壺（109）である。大型壺は口縁部を再加工して使用されていたことをも重視すれば、土器棺として転用された可能性が想起される。つまり、壺が卓越する組成、大型壺の存在から、P 82 工区付近は墓域に相当していた可能性が考えられる。また、P82 工区 SU01 は先の編年の検討から、廻間 I 式 I 段階に相当する一括資料に準じた資料であること確認した。この検討結果は、墳墓周囲における土器の一括遺棄を連想させるもので、P 82 工区付近が墓域として機能したとする先の推定を補強する。

他地域系土器や線刻土器の出土が特徴的であった P 83 工区は、SU01・03 において高杯・器台・鉢が相対的に高率を示す一方、SU03 は甕が 2 割程度と低率であった。その他、特徴的な傾向として、同じく P 83 工区において甕が低率である一方、壺がいずれの計測法においても 5 割近い高率を示すこと、P 80 工区 SU01 において高杯が比較的高率であることなどが指摘できるが、これらについては、時期幅が見込まれる集合資料であることを考慮して、傾向のみを指摘するに留めたい。

出土量の計測

計測方法

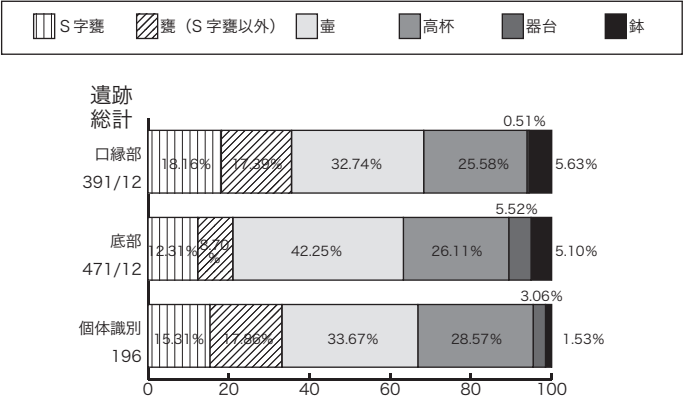
遺跡総計

P 82 工区

P 83 工区

第24表 宇福寺遺跡器種組成表（遺跡総計）

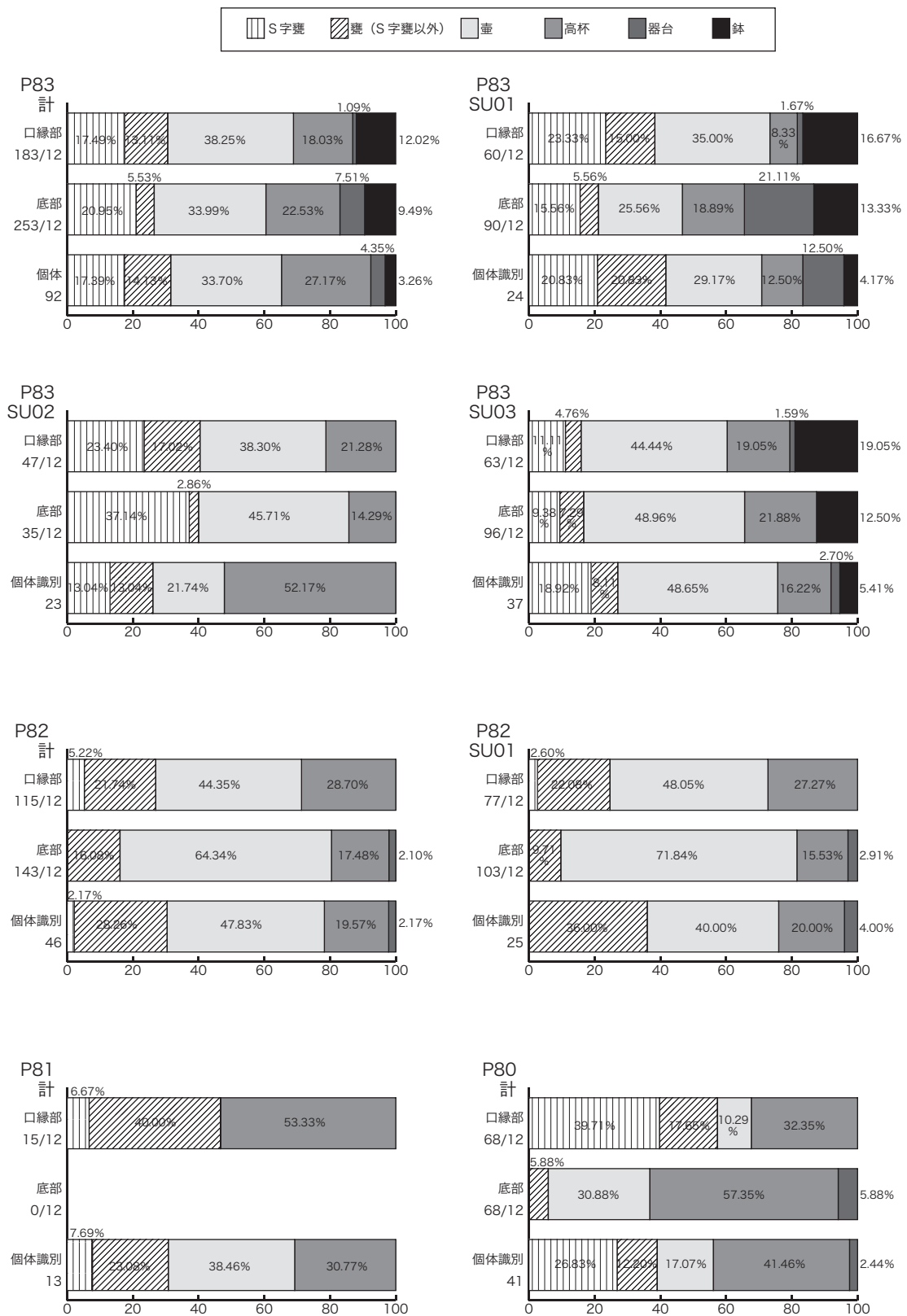
		S字甕	甕(S字甕以外)	壺	高杯	器台	鉢	計
遺跡総計	口縁部	71/12 (18.16%)	68/12 (17.39%)	128/12 (32.74%)	100/12 (25.58%)	2/12 (0.51%)	22/12 (5.63%)	391/12 (100.00%)
	底部	58/12 (12.31%)	41/12 (8.70%)	199/12 (42.25%)	123/12 (26.11%)	26/12 (5.63%)	24/12 (5.10%)	471/12 (100.00%)
	個体識別	30 (15.31%)	35 (17.86%)	66 (33.67%)	56 (28.57%)	6 (3.06%)	3 (1.53%)	196 (100.00%)



第265図 宇福寺遺跡器種組成（遺跡総計）

第25表 宇福寺遺跡器種組成表（各工区・遺構）

		S字甕		甕(S字甕以外)		壺		高杯		器台		鉢		計	
P86総計	口縁部	0/12 (0.00%)	1/12 (25.00%)	0/12 (0.00%)	3/12 (75.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	4/12 (100.00%)							
	底部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	1/12 (100.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	1/12 (100.00%)							
	個体識別	0 (0.00%)	1 (50.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)							
P84総計	口縁部	0/12 (0.00%)	3/12 (50.00%)	2/12 (33.33%)	1/12 (16.67%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	6/12 (100.00%)							
	底部	5/12 (83.33%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	1/12 (16.67%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	6/12 (100.00%)							
	個体識別	1 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)							
P83	SU01	口縁部	14/12 (23.33%)	9/12 (15.00%)	21/12 (35.00%)	5/12 (8.33%)	1/12 (1.67%)	10/12 (16.67%)	60/12 (100.00%)						
		底部	14/12 (15.56%)	5/12 (5.56%)	23/12 (25.56%)	17/12 (18.89%)	19/12 (21.11%)	12/12 (13.33%)	90/12 (100.00%)						
		個体識別	5 (20.83%)	5 (20.83%)	7 (29.17%)	3 (12.50%)	3 (12.50%)	1 (4.17%)	24 (100.00%)						
	SU02	口縁部	11/12 (23.40%)	8/12 (17.02%)	18/12 (38.30%)	10/12 (21.28%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	47/12 (100.00%)						
		底部	13/12 (37.14%)	1/12 (2.86%)	16/12 (45.71%)	5/12 (14.29%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	35/12 (100.00%)						
		個体識別	3 (13.04%)	3 (13.04%)	5 (21.74%)	12 (52.17%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	23 (100.00%)						
	SU03	口縁部	7/12 (11.11%)	3/12 (4.76%)	28/12 (44.44%)	12/12 (19.05%)	1/12 (1.59%)	12/12 (19.05%)	63/12 (100.00%)						
		底部	9/12 (9.38%)	7/12 (7.29%)	47/12 (48.96%)	21/12 (21.88%)	0/12 (0.00%)	12/12 (12.50%)	96/12 (100.00%)						
		個体識別	7 (18.92%)	3 (8.11%)	18 (48.65%)	6 (16.22%)	1 (2.70%)	2 (5.41%)	37 (100.00%)						
	その他	口縁部	0/12 (0.00%)	4/12 (30.77%)	3/12 (23.08%)	6/12 (46.15%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	13/12 (100.00%)						
		底部	17/12 (53.13%)	1/12 (3.13%)	0/12 (0.00%)	14/12 (43.75%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	32/12 (100.00%)						
		個体識別	1 (12.50%)	2 (25.00%)	1 (12.50%)	4 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	8 (100.00%)						
	計	口縁部	32/12 (17.49%)	24/12 (13.11%)	70/12 (38.25%)	33/12 (18.03%)	2/12 (1.09%)	22/12 (12.02%)	183/12 (100.00%)						
		底部	53/12 (20.95%)	14/12 (5.53%)	86/12 (33.99%)	57/12 (22.53%)	19/12 (7.51%)	24/12 (9.49%)	253/12 (100.00%)						
		個体識別	16 (17.39%)	13 (14.13%)	31 (33.70%)	25 (27.17%)	4 (4.35%)	3 (3.26%)	92 (100.00%)						
P82	SU01	口縁部	2/12 (2.60%)	17/12 (22.08%)	37/12 (48.05%)	21/12 (27.27%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	77/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	10/12 (9.71%)	74/12 (71.84%)	16/12 (15.53%)	3/12 (2.91%)	0/12 (0.00%)	103/12 (100.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	9 (36.00%)	10 (40.00%)	5 (20.00%)	1 (4.00%)	0 (0.00%)	25 (100.00%)						
	SU02	口縁部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	4/12 (100.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	4/12 (100.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	1 (33.33%)	2 (66.67%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	3 (100.00%)						
	SU03	口縁部	3/12 (13.64%)	4/12 (18.18%)	12/12 (54.55%)	3/12 (13.64%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	22/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	5/12 (19.23%)	12/12 (46.15%)	9/12 (34.62%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	26/12 (100.00%)						
		個体識別	1 (9.09%)	2 (18.18%)	7 (63.64%)	1 (9.09%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	11 (100.00%)						
	SU04	口縁部	0/12 (0.00%)	2/12 (28.57%)	0/12 (0.00%)	5/12 (71.43%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	7/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)						
	その他	口縁部	0/12 (0.00%)	2/12 (25.00%)	3/12 (37.50%)	3/12 (37.50%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	8/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	4/12 (40.00%)	6/12 (60.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	10/12 (100.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	0 (0.00%)	3 (60.00%)	2 (40.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	5 (100.00%)						
	計	口縁部	6/12 (5.22%)	25/12 (21.74%)	51/12 (44.35%)	33/12 (28.70%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	115/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	23/12 (16.08%)	92/12 (64.34%)	25/12 (17.48%)	3/12 (2.10%)	0/12 (0.00%)	143/12 (100.00%)						
		個体識別	1 (2.17%)	13 (28.26%)	22 (47.83%)	9 (19.57%)	1 (2.17%)	0 (0.00%)	46 (100.00%)						
P81総計	口縁部	1/12 (6.67%)	6/12 (40.00%)	0/12 (0.00%)	8/12 (53.33%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	15/12 (100.00%)							
	底部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)							
	個体識別	1 (7.69%)	3 (23.08%)	5 (38.46%)	4 (30.77%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	13 (100.00%)							
P80	SU01	口縁部	27/12 (42.86%)	11/12 (17.46%)	7/12 (11.11%)	18/12 (28.57%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	63/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	4/12 (5.88%)	21/12 (30.88%)	39/12 (57.35%)	4/12 (5.88%)	0/12 (0.00%)	68/12 (100.00%)						
		個体識別	11 (26.83%)	5 (12.20%)	7 (17.07%)	17 (41.46%)	1 (2.44%)	0 (0.00%)	41 (100.00%)						
	SU02	口縁部	0/12 (0.00%)	1/12 (25.00%)	0/12 (0.00%)	3/12 (75.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	4/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)						
	その他	口縁部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	1/12 (100.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	1/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)						
		個体識別	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)						
	計	口縁部	27/12 (39.71%)	12/12 (17.65%)	7/12 (10.29%)	22/12 (32.35%)	0/12 (0.00%)	0/12 (0.00%)	68/12 (100.00%)						
		底部	0/12 (0.00%)	4/12 (5.88%)	21/12 (30.88%)	39/12 (57.35%)	4/12 (5.88%)	0/12 (0.00%)	68/12 (100.00%)						
		個体識別	11 (26.83%)	5 (12.20%)	7 (17.07%)	17 (41.46%)	1 (2.44%)	0 (0.00%)	41 (100.00%)						



第266図 宇福寺遺跡器種組成（各工区・遺構）

(3) 他地域系土器

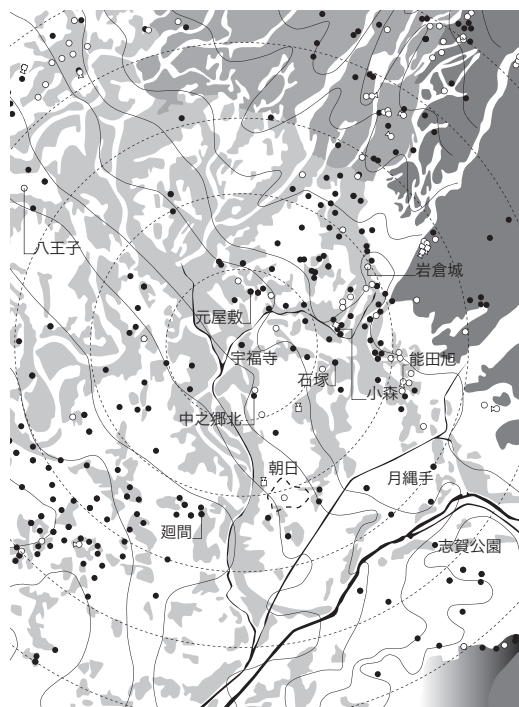
概要

本遺跡における特記すべき特徴の一つとして、他地域に出自が求められる土器（以下、他地域系土器とする）の出土がある。P 84 工区の布留式の高杯（5）、P 83 工区 SU03、同 SU01 の月影式の器台（16・59）、同 SU02 の箱清水式の甕（88・89）がその特徴的な存在である。その他、出自の特定が難しいやや不確定な個体として、P 83 工区 SU01 の高杯（55）、同 SU02 の折返し口縁の甕（87）、P 82 工区 SU03 の縄文を施した壺（136）、P 80 工区の蓋（175）などが列挙される。

宇福寺遺跡と小森遺跡

本遺跡の至近に同様な特徴が指摘される遺跡として、岩倉市小森遺跡がある。

小森遺跡は宇福寺遺跡から五条川の上流



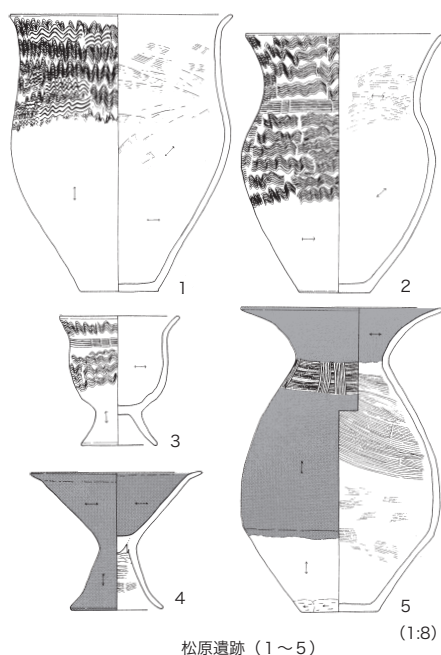
第267図 関連遺跡分布図 (1:200,000)

(東) 方向に約 2.5km 隔てた位置にある (第 267 図)。とりわけ両遺跡において確認される箱清水式土器は、遺跡相互の関係を象徴的に明示する存在として注目される。箱清水式土器については、個体の特徴から、土器そのものがもたらされた可能性が高く、小森遺跡において出土した十王台式の甕についても同様の可能性が示唆されている。さらに宇福寺遺跡において出土した月影式の器台、布留式の高杯についても、型式を構成する諸属性の多くを充足することをすでに指摘した。ここに示した内容は、他地域系土器の存在形態、消費形態を遺跡、集団に則して理解するうえで重要である。

出土傾向

P83工区

宇福寺遺跡においては、月影式の器台（16・59）と高杯（55）、箱清水式の甕（88・89）の出土は P 83 工区に集中し、他の工区における他地域系土器の出土はそれほど顕著でない。その要因として、一つには P 83 工区と他の工区において遺構が継続する期間が異なっていたことが考えられる。それは、P 83 工区出土土器は廻間Ⅱ式前半に偏りがある一方、P 82・80 工区出土土器は廻間Ⅰ式前半に偏りがあることから、他地域系土器が顕在化する現象には時期的な傾向が反映されていたらしいとする理解である。それとは別に、地点ごとに土器の消費形態が異なり、それらが相互補完の関係にあったこと（杉本 1999）も想定されるが、出土状況についての情報が欠如する今、積極的に後者の可能性を議論の対象とすることは難しい。消極的ながら、前者の可能性がより妥当であるとする評価によりながら、他地域系土器が顕在化する現象と時期的な傾向について、周辺の遺跡の状況をも参照しつつ、検討を加えることとする。



松原遺跡 (1~5)

第268図 箱清水式の主要器種

さて、小森遺跡においては同じく「中部高地型櫛描文」を施した箱清水式の甕（第269図1）が出土する。小森遺跡の甕は、波状文と簾状文を施文する一群の甕に属する。加えて、小森遺跡には赤彩を施した壺（同2・3）、高杯（同4）の出土も確認できる。このとき、箱清水式を構成する壺、高杯といった器種の存否から、宇福寺遺跡と小森遺跡の「中部高地型櫛描文」を施す甕が樽式ではなく、箱清水式とするのが妥当との判断が導かれる。この判断は、すでに笹澤浩が小森遺跡の甕を樽式ではなく「広義の箱清水式」と理解したこと（笹澤1988）を追認する。さらに不確実ながら、小森遺跡において台付長頸壺とされている第269図5は、脚部が裾に向かって緩やかに広がる形態から、箱清水式の台付甕に関係する可能性をも指摘したい。いずれにせよ、宇福寺遺跡と小森遺跡を含む一帯の地域には、簾状文を施文しない甕、簾状文を施文する甕、赤彩壺、赤彩高杯、あるいは台付甕といった箱清水式を構成する器種（第268図）の多くがもたらされていることになる。

箱清水式の時期的な解釈については、宇福寺遺跡、小森遺跡とも出土状況についての情報に乏しく、確実な解釈を導くまでに及ばないが、宇福寺遺跡P 83 工区出土土器は、廻

箱清水式土器について

宇福寺遺跡において出土した箱清水式の器種は、「中部高地型櫛描文」（佐原1959、笹澤1978）を施し、頸部に簾状文を施文しない一群の甕である（98・99）。箱清水式において簾状文を施文しない甕（第268図1）は、簾状文を施文する甕（同2）と共存し、前者の一群は頸部の括れの度合いが弱い傾向にあるという（青木1998）。宇福寺遺跡の例では、括れの度合いが弱い89が箱清水式の簾状文を施文しない甕の傾向によく合致する一方、頸部の括れの度合いが強い88が同時に出土する。箱清水式の甕において、口縁部が外反、伸長する傾向は後出の要素とされるので、後者の出土は時期的な傾向、つまり、箱清水式でも後出する傾向が関与している可能性も考慮される。

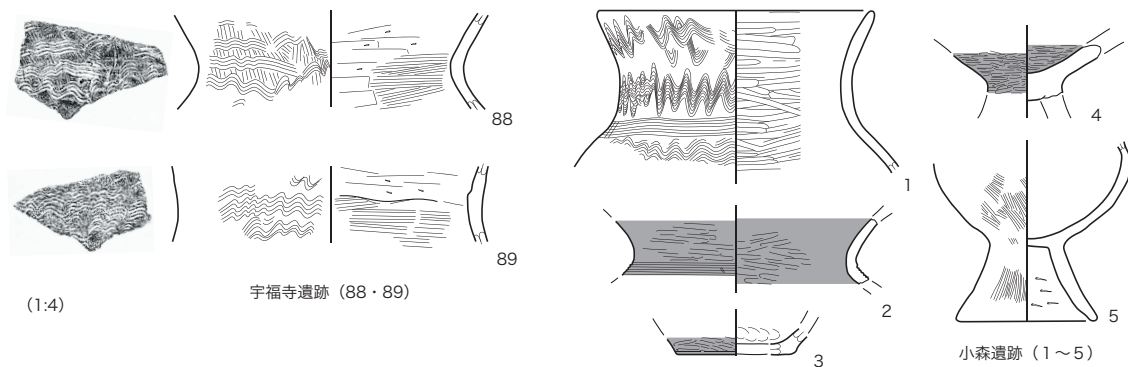
中部高地型櫛描文

頸部の簾状文

小森遺跡

樽式と箱清水式

時期



宇福寺遺跡 (88・89)

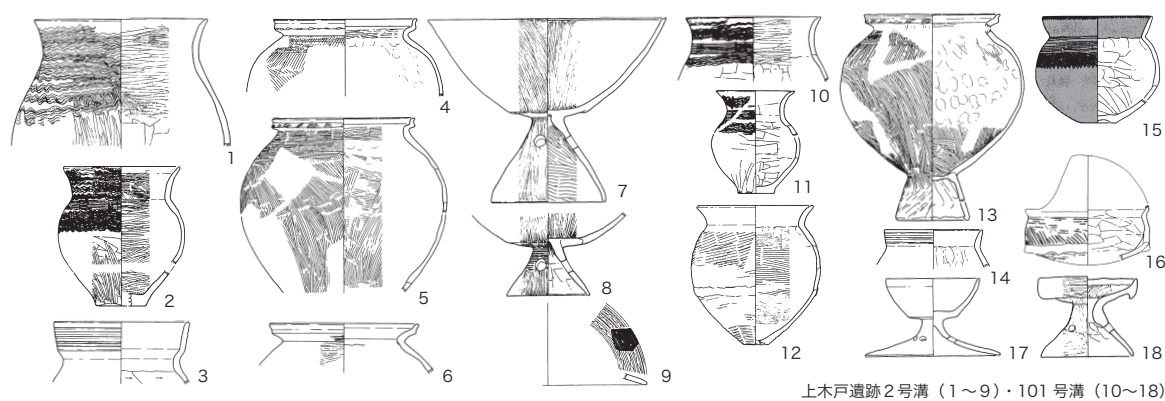
小森遺跡 (1~5)

第269図 宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器

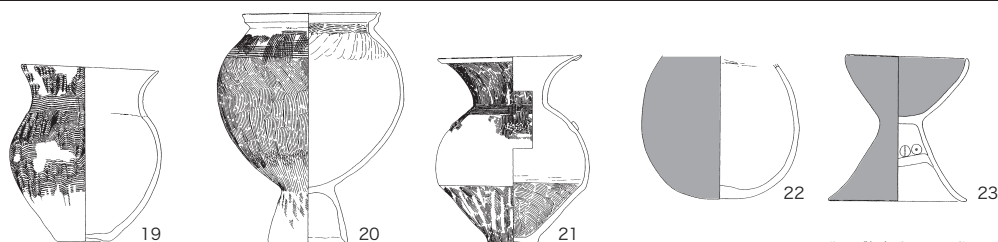
間Ⅱ式前半の土器が主であることをすでに確認した。加えて、小森遺跡においても箱清水式土器が出土した地区は、S字甕A類や内彎志向を認める高杯などの出土が多いことが指摘されている（加納・浅野・北村 1988）。これらから、両遺跡の箱清水式土器は、廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半に対応する可能性が示される。

箱清水式土器様式圏

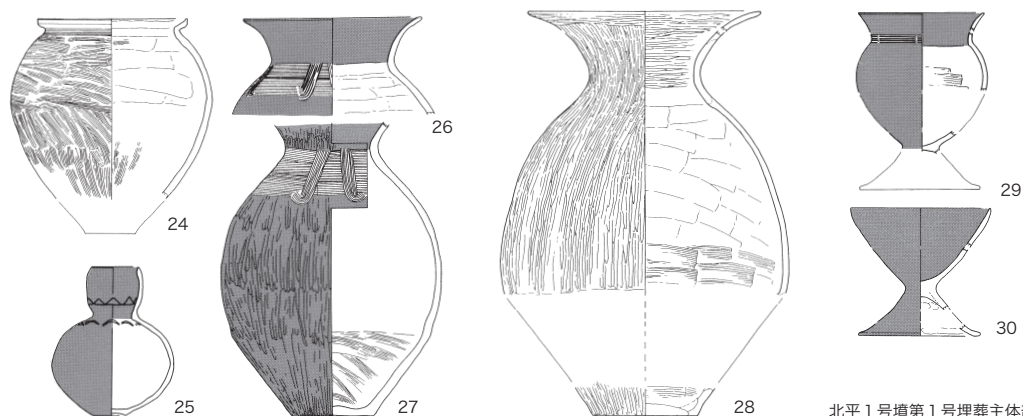
一方、箱清水式土器様式圏（笹澤 1987、青木 2001）においては、長野県上木戸遺跡 2 号溝・101 号溝に S 字甕 A 類新段階（第 270 図 4・5・13）、同御屋敷遺跡 Y 4 号住居に S 字甕 B 類古段階（同 20）、同北平 1 号墳に東海地方の内彎短頸壺を模した器種（同 25）がそれぞれ箱清水式土器と共存する。青木一男による「北平編年」（青木 1996）によれば、上木戸遺跡は 3 期後半、御屋敷遺跡と北平 1 号墳は 4 期に対応するとされる。なお 3 期は典型的な箱清水式土器の一群によって器種が構成される段階で、4 期は「外来系土器群の増加と中部高地型土器群の変容」が進行する段階であるという。つまり、箱清水式土器の後半部分から終末にかかる段階は、S 字甕 A 類新段階～B 類古段階、廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半に対応する公算が見込まれる。この公算は、宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器が廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半に対応する可能性が示されたこと、両遺跡の箱清水式の甕に後出する要素が認められたこととも調和的である。



上木戸遺跡 2 号溝（1～9）・101 号溝（10～18）



御屋敷遺跡 Y 4 号住居（19～23）



北平 1 号墳第 1 号埋葬主体部（24～30）

第 270 図 箱清水式土器様式圏における東海系土器

月影式土器について

宇福寺遺跡出土土器において月影式との関係が考慮される器種として器台と高杯がある。いずれも全形が不明であるので、詳細な比較は困難であるが、およその位置を確認しておきたい。器台（16・59）については、全体に矮小化が進行していること、杯部が無文で、脚部の有段部分に擬凹線のみを施す特徴から、月影式の後半部分、田嶋明人による漆町編年でいうところの漆4群（田嶋 1986）に相当すると理解し、前後に多少の振幅を見込んでおきたい。高杯（55）については変容する部分が少なからず認められるので、参考資料とせざるをえないが、全体に矮小化していること、口縁部の外反が顕著でないことから、器台と時期を大きく隔てることはないように思われる。なお、月影式は廻間Ⅰ式におよそ対応し、漆4群は廻間Ⅰ式後半に対応する関係がすでに多くの論者によって示されている（赤塚 1990、堀 2002 など）。

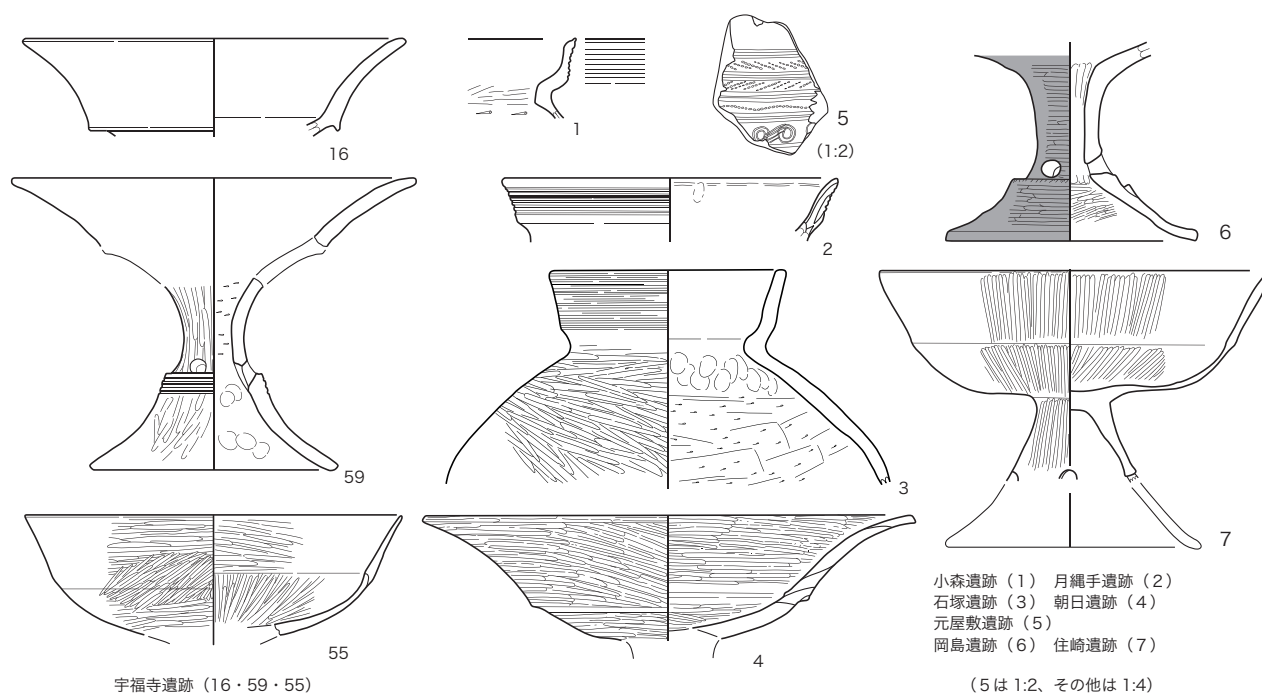
一方、小森遺跡では有段口縁に擬凹線を施した鉢が出土している（第 271 図 1）。やはり時期の特定は難しいが、原田幹は「口縁部先端が先細りし外反が強くなる傾向が見いだせ」る特徴から、廻間Ⅱ式、（月影式に後続する）白江式に対比している（原田 1998）。

宇福寺遺跡 P 83 工区 SU01 出土土器は、相対として廻間Ⅱ式前半に帰属する土器が多いものの、その前後の土器も一定量含まれるので、宇福寺遺跡や小森遺跡の北陸系土器がその型式的特徴から、廻間Ⅰ式後半から廻間Ⅱ式との対応関係が求められたことと原則的には矛盾しない。なお、宇福寺遺跡や小森遺跡以外にも、五条川左岸から庄内川右岸までの一帯の地域には（小森遺跡は現五条川の右岸）、名古屋市月縄手遺跡に擬凹線を施した甕（第 271 図 2）、師勝町石塚遺跡に擬凹線を施した壺（同 3）、清須市朝日遺跡に精製の高杯（同 4）がそれぞれ出土するように、北陸地方に系譜する多様な器種が点在して分布することは注意されてよい。なお、一宮市元屋敷遺跡では、S 字状スタンプ文を模した文様を施した土器（同 5）が出土していることも付け加えておく。

月影式

小森遺跡

北陸系土器の分布



第271図 北陸系土器と関連資料

中挾間遺跡
貝蔵遺跡

さて、北陸系土器の定量の出土が確認できる西三河地域の安城市中挾間遺跡は、北陸系土器の器種が有段口縁の甕に著しく偏重する一方、三重県貝蔵遺跡は装飾器台と高杯に偏重する。このように同時期の遺跡でありながら、北陸系土器の存在形態は遺跡において大きく異なる側面が認められる。宇福寺遺跡において月影式の器台、月影式に系譜する高杯に類似する個体が出土する様態は、傾向としては後者に類似する。あるいは、宇福寺遺跡の器台と高杯が西尾市岡島遺跡の器台または装飾器台（第271図6）、同住崎遺跡の変容が進んだ高杯（同7）にそれぞれ類似することから、宇福寺遺跡における出土の傾向は、矢作川下流域のそれに近い側面があることも指摘しておきたい。

布留式土器について

布留式の高杯

宇福寺遺跡において出土した布留式の高杯（5）は、布留式における精製器種としての諸属性（次山1993）を充足する存在として注目される。ただし、出土状況から帰属時期についての情報を導くことは難しい。そこで、その類例を求めることで、およその位置を確認し、周辺の問題の幾つかについても整理しておきたい。

濃尾平野においてヨコミガキを施す精製器種としての高杯の出土は、西春町中之郷北遺跡（第272図2）、一宮市門間沼遺跡（同3）、一宮市八王子遺跡（同9）などにおいて確認される。また、ヨコミガキは確認できないが、形態などから布留式に系譜すると考えられる高杯は、岐阜県象鼻山1号墳（同4）、名古屋市志賀公園遺跡（同7）などにおいて出土している。

中之郷北遺跡

中之郷北遺跡H区SU04出土の高杯（第272図2）は、杯部外面に幅約1mmの沈線状のヨコミガキ、杯部内面に暗文風のミガキを放射状に施す。SU04においては、S字甕D類古段階など、松河戸I式初頭の土器が大量に出土している。

門間沼遺跡

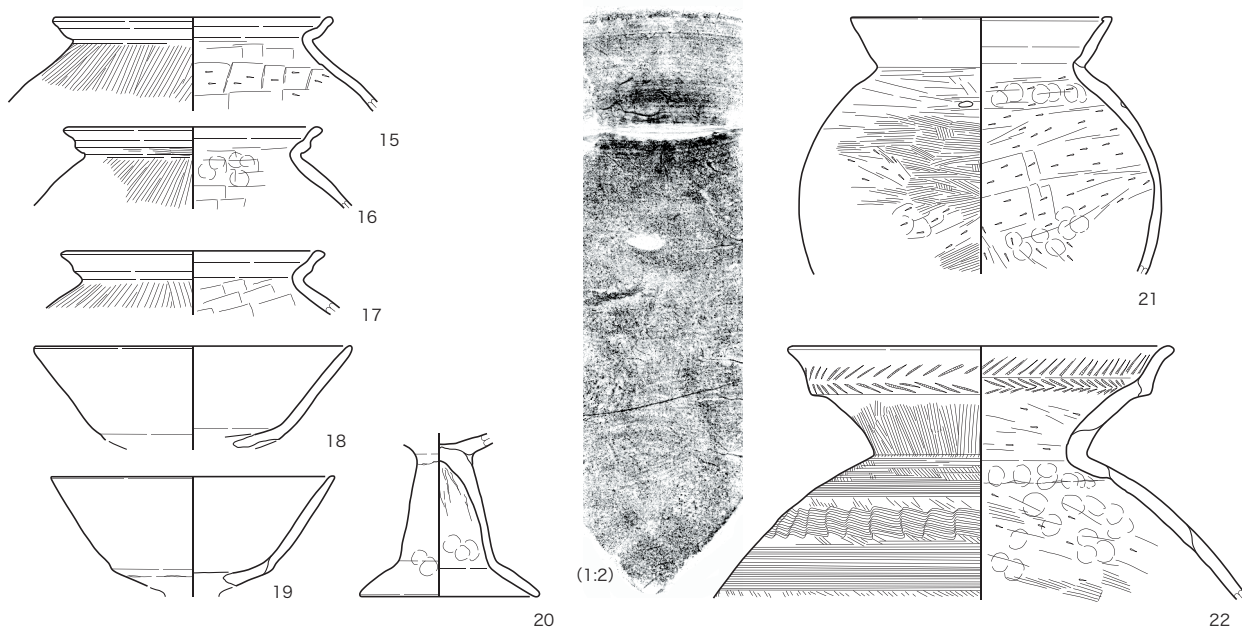
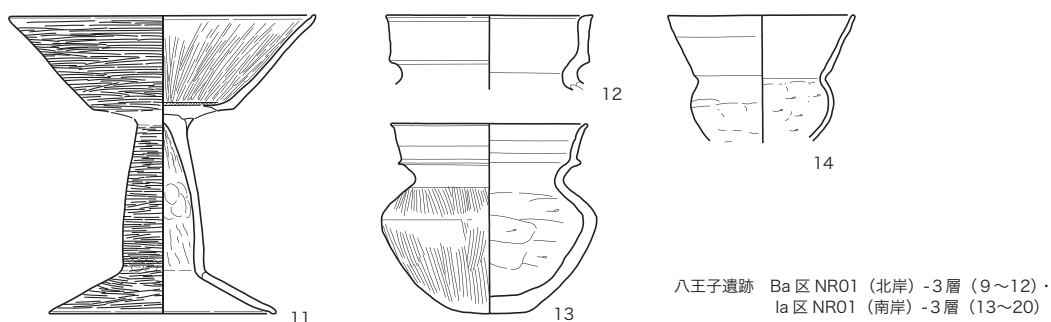
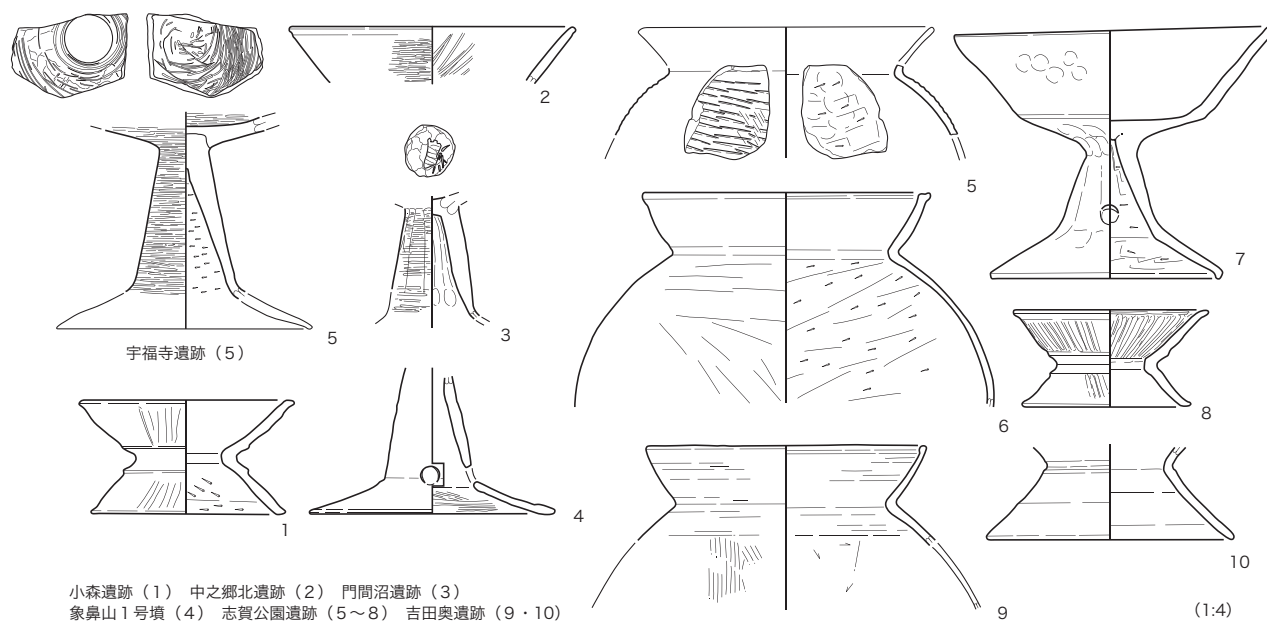
門間沼遺跡94Ca区SK04出土の高杯（第272図3）は、脚部外面に細かいヨコミガキを施すもので、脚頂部には杯部と接合するためのへう工具によるキザミが観察される。共伴する土器は先行する時期の個体が主であるが、廻間Ⅲ式の低脚高杯も含まれるので、それとの対応関係を仮に想定することとしたい。

八王子遺跡

八王子遺跡Ba区NR01-3層上層出土の高杯（第272図11）は、杯部と脚部の外面に幅約1mmの沈線状のヨコミガキを密に施すもので、杯部内面には不明瞭なものの、外面に比べて幅広の匙面状のミガキが放射状に施される。杯部と脚部の接合は、脚頂部の上面と側面に粘土を付加して杯部を成形する手法によるもので、宇福寺遺跡の高杯に共通する。なお、Ba区NR01（北岸）の対岸、Ia区NR01（南岸）の同一層位においては、米粒形列点文（次山1995）を押捺した布留式甕（同21）も確認できる。両岸の同一層位において共伴する土器（同12～22）は、S字甕D類古段階（同15～17）、無透孔屈折脚高杯（同18～20）など、松河戸I式前半に対応する個体が多い。ただし、柳ヶ坪型壺（同22）は、口縁部上段が短く口縁部下段が長い、体部上半の文様が3段で構成される特徴から、廻間遺跡SZ01e地点から出土した柳ヶ坪型壺に型



写真104 脚頂部のキザミ（門間沼遺跡）



第272図 布留式土器と関連資料

式的に先行する。廻間遺跡 SZ01 e 地点出土土器は、廻間Ⅲ式 2 段階に対比されているので、八王子遺跡 Ba 区 NR01- 3 層上層出土の高杯については、廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式前半のいずれかの時期に帰属することになるが、それ以上の詳細な対比は難しい。

本川遺跡

なお、三河地域においては、豊田市本川遺跡 SB2080、同 SB2081、同 SD2001 下層などにおいてヨコミガキを施した精製の高杯が確認できる。宇福寺遺跡の高杯と同じく硬質に焼成された個体、布留式の高杯にしばしば認められる脚裾部内面の布目圧痕が確認できる個体が特徴的である。詳細な時期の対比については、遺跡全体を通じて改めて検討したいが、松河戸式に先行しないことは確かである。

上に示した諸例から、布留式の高杯は、尾張地域とその周辺において廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式前半に顕在化することが確かめられる。このことは、宇福寺遺跡において布留式の高杯が出土した P 84 工区に隣接する P 83 工区において、廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式の土器が抽出される事実とも符合する。宇福寺遺跡を含めた各遺跡における出土状況からは、松河戸Ⅰ式前半に対比される公算がより大きいと見込まれるが、精製の度合いが顕著な高杯については、廻間Ⅲ式に対比される個体も少なくはないと思われる。いずれにせよ、これ以上の推断については、より多くの良好な資料の抽出が必要である。

他地域系土器の存在形態

前項における时期的な傾向の整理を踏まえて、他地域系土器として一括される土器の存在形態とその背景について、周辺の問題も含めて整理したい。

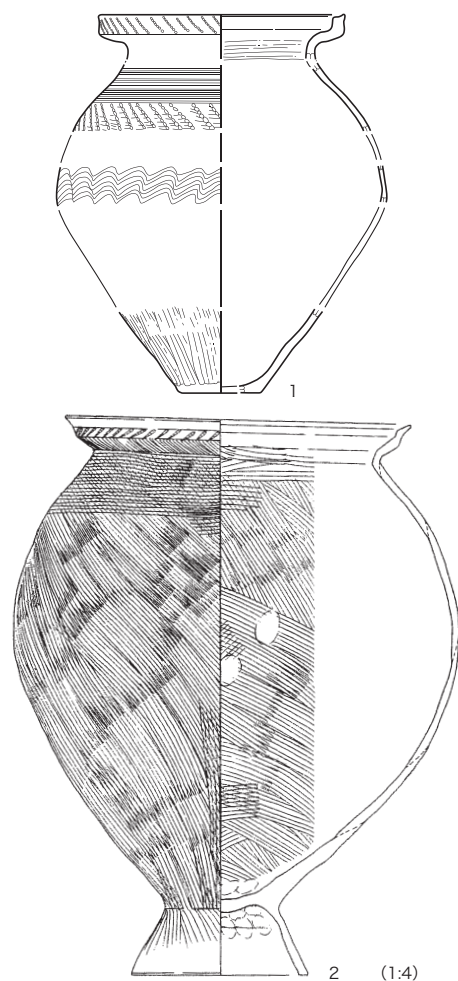
廻間Ⅰ式前半まで

宇福寺遺跡における他地域系土器の出土傾向を整理したように、廻間Ⅰ式前半までにおける他地域系土器の顕在化は顕著でない。ただし、遺跡周辺においては隣接地域に系譜が求められる土器の出土が指摘できることがある。その具体的な例が、岩倉市岩倉城遺跡の受口甕（第 273 図 1）、元屋敷遺跡の S 字甕 0 類（同 2）である。前者は湖南地域（野洲川下流域）、後者は中南勢地域（雲出川流域）から搬入された可能性が考慮される。これについては、弥生時代から続く伝統的な地域間関係が作用した結果、生成した現象として理解されるであろう。

廻間Ⅰ式後半～

廻間Ⅱ式後半

廻間Ⅰ式後半から廻間Ⅱ式前半にかけて、宇福寺遺跡を含めた周辺地域に中部高地の箱清水式、北陸の月影式に系譜する土器の出土が顕在化する。箱清水式については、宇福寺遺跡と小森遺跡を通じて各器種の出土が確認されることから、体系的な器種の移入が果た



岩倉城遺跡（1） 元屋敷遺跡（2）

第273図 受口甕とS字甕0類

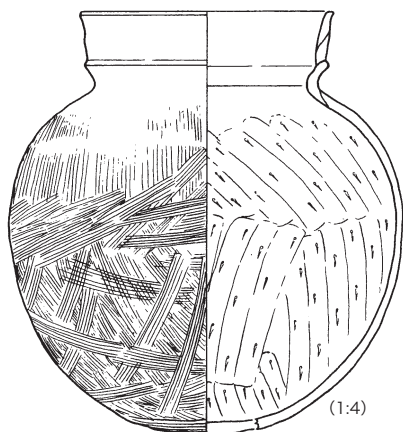
された可能性がある。月影式についても、周辺地域を含めると、器台や高杯、鉢、擬凹線を施した有段口縁の甕など各器種の出土が確認され、西三河地域などに発現する擬凹線を施した有段口縁甕が偏向的に顕在化する現象とは移入の背景が異なっていた可能性を指摘した。小森遺跡から出土した十王台式の甕についても、個体の特徴と出土状況から、箱清水式などと同時期に搬入された可能性が示唆されている（鈴木 1988、加納・浅野・北村 1988）。つまり、宇福寺遺跡周辺においては、東日本各地の土器が同時に顕在化する特異な現象が生起していたことになる。

同時期、「廻間様式の第1次拡散」が東日本各地に向けて発信するとされている（赤塚 1990）。この現象を受けて、東日本各地では土器様式の構造転換が果たされたこともしばしば指摘されている。拡散の具体的な過程、様式の構造転換の内実については、必ずしも明確化されていないが、少なくとも宇福寺遺跡周辺への東日本各地の土器が顕在化する現象と、「廻間様式の第1次拡散」が相互に呼応していた可能性が示されたことは、今後の議論の展開に少なからず影響を及ぼすであろう。

廻間Ⅲ式以降は、前段階までとは異なり布留式の器種が顕在化する。宇福寺遺跡においては、ヨコミガキを施した布留式の精製高杯の存在が特徴的であった。さらに同時期に対応する他地域に系譜する特徴的な器種として、小森遺跡の小型鼓形器台がある。ここで両者の関係について、今少し整理することとしたい。

というのも、布留式の器種と山陰地方に系譜が求められる器種が共存する事例は周辺地域においてしばしば認められるからである。先に例示した志賀公園遺跡では、布留式の高杯（第272図7）、甕（同6）に加えて鼓形器台（同8）の出土が確認されるし、八王子遺跡においても、布留式の高杯（同11）が出土したBa区NR01-3層上層において、山陰系の壺（同12・13）が共伴する。また、布留式甕と鼓形器台の共存は瀬戸市吉田奥遺跡（同9・10）、岐阜県顔戸南遺跡においても確認できる。八王子遺跡の山陰系の壺は、口縁部の特徴が山陰地方における通有の有段口縁壺に近似するも、底部など器壁が全体に重厚であることから、模倣品として把握するのが妥当であろう。なお、共伴した布留式甕に施される雨粒形列点文の系譜は、吉備南部系の甕に認められるという（次山 1997）。

加えて、朝日遺跡出土の山陰系の有段口縁を付した布留式甕は、同一個体において布留式と山陰系の要素が混在する特徴的な個体である（第274図）。同時期に顕著に認められ



第274図 朝日遺跡の布留式甕

るいわゆる「山陰系口縁」を付した大型のS字甕に対しても、布留式甕と共伴する事例が多いことから、同様の関心が向けられるところである。

次山淳は布留形（式）甕の口縁部形態、肩部への文様施文の分析を通じて、初期布留式土器群の伝播に、＜山陰系畿内集団＞、＜吉備系畿内集団＞といった二重性を反映した出自集団の関与があったことを指摘した（次山 1997）。尾張地域において布留式の器種が、「山陰系」の要素を内在しつつ顕在化する現象も、次山が指摘する現象と重ね合わせて理解することも必要であろう。これら

廻間Ⅲ式以降

布留式と山陰系

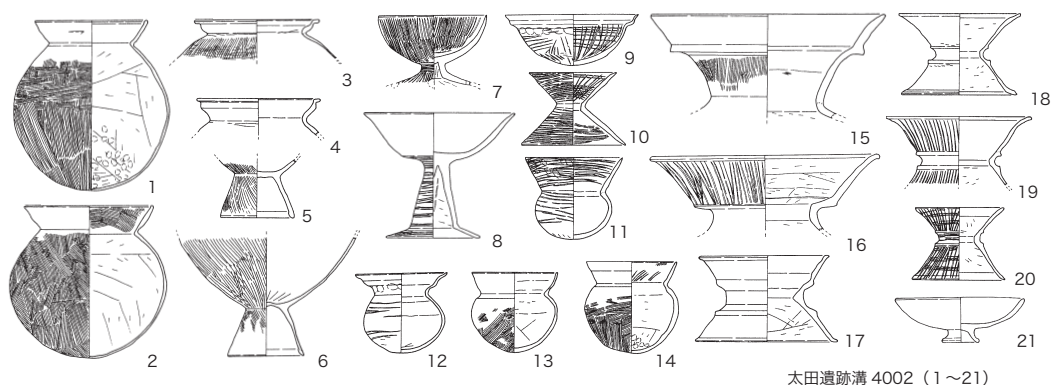
志賀公園遺跡

八王子遺跡

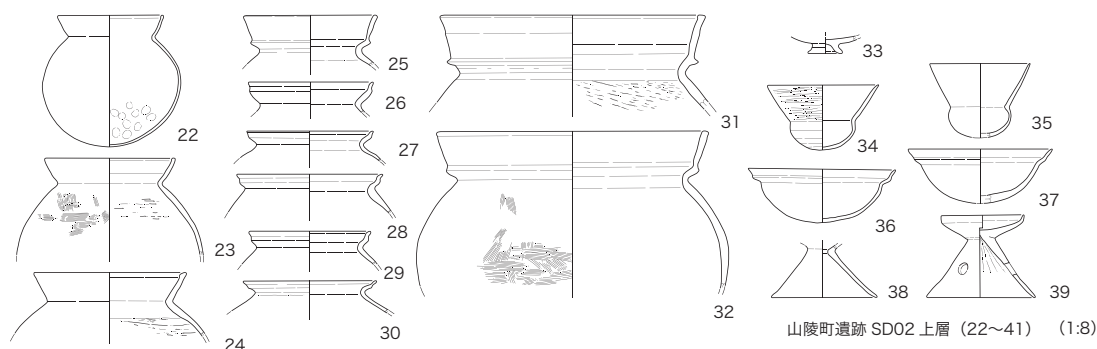
吉田奥遺跡

朝日遺跡

出自の二重性



太田遺跡溝 4002 (1~21)



山陵町遺跡 SD02 上層 (22~41) (1:8)

第275図 畿内における東海系と山陰系の共存

の現象が発現する具体的な過程はともかくとして、出自の地域、集団にかかる択一的な理解は退けられるべきである。

第2次拡散

また、布留式の器種の顕在化が発現する廻間Ⅲ式は、「廻間様式の第2次拡散」期（赤塚 1990）にも相当する。これに関連して原田幹は、S字甕C類段階における拡散（「廻間様式の第2次拡散」）は畿内への拡散がむしろ主体的な現象であったことを指摘した（原田 1994）。このとき畿内においても奈良県太田遺跡溝 4002、同山陵町遺跡 SD02 上層などにおいて東海系と山陰系にそれぞれ出自が求められる器種が共存する現象についても目を向けておきたい（第 275 図）。前者においては通有の鼓形器台（第 275 図 16～19）、小型鼓形器台（同 20）、低脚杯（同 21）と S 字甕 C 類などが、後者においては S 字甕 C～D 類（同 26～30）と有段口縁の甕（同 31・32）、低脚杯（同 33）などが共存する。

畿内における 東海系と山陰系

小結

以上、宇福寺遺跡と周辺の遺跡における他地域系土器について基本的な内容を確認した。その作業を通じて、他地域系土器の存在形態は各時期を通じて決して一様ではなく、段階と内容が全く異なる現象が継起していたことを明らかとした。大略、最初の段階が廻間Ⅰ式前半まで、次の段階が廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式、最後の段階が廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式前半である。最後に、他地域系土器の存在形態の推移と地域社会の関係について、見通しのみを述べたい。

廻間Ⅰ式前半まで

廻間Ⅰ式前半までの段階は、隣接する地域に系譜する土器が顕在化する段階で、弥生時代から継続する伝統的な地域間関係が作用したと理解した。同時期の土器様式において多様な形式が生成される現象は、隣接地域間における土器の搬出入、あるいは土器製作技術の交換がごく頻繁であったことに起因するのであろう。見かけ上、隣接地域間に類似の土

器様式、いわゆる地域的小様式（鈴木 1987 など）が連接する構図についても、これらの現象と一体化させつつ理解する必要があるように思われる。

廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式の段階は、中部高地、北陸、関東東部など東日本各地の土器が宇福寺遺跡周辺の一帯にもたらされる。この現象は「廻間様式の第Ⅰ次拡散」（赤塚 1990）と呼応した現象であった可能性を指摘した。一方、八王子遺跡などを包摂する日光川水系など、周辺の地域に類似した現象は確認されない。また、中挾間遺跡を包摂する古井遺跡群などにおいて他地域系土器が顕在化する現象とは、傾向として一致しない部分も認められた。これらから、他地域系土器が顕在化する現象は、小地域単位（水系単位）で完結する傾向にあったと推測される。つまり、他地域系土器の存在形態からは、小宇宙的な単位が互いに連接する地域構造を想定することが可能であろう。

このとき、宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の線刻土器（第 276 図）についても言及しておきたい。というのも、宇福寺遺跡において、線刻土器は他地域系土器と同じく、P 83 工区に集中して出土すること、古井遺跡群においては、他地域系土器と線刻土器が濃密に分布する（斎藤編 2001）ことから、両者には一定の相関があったことも予測されるからである。

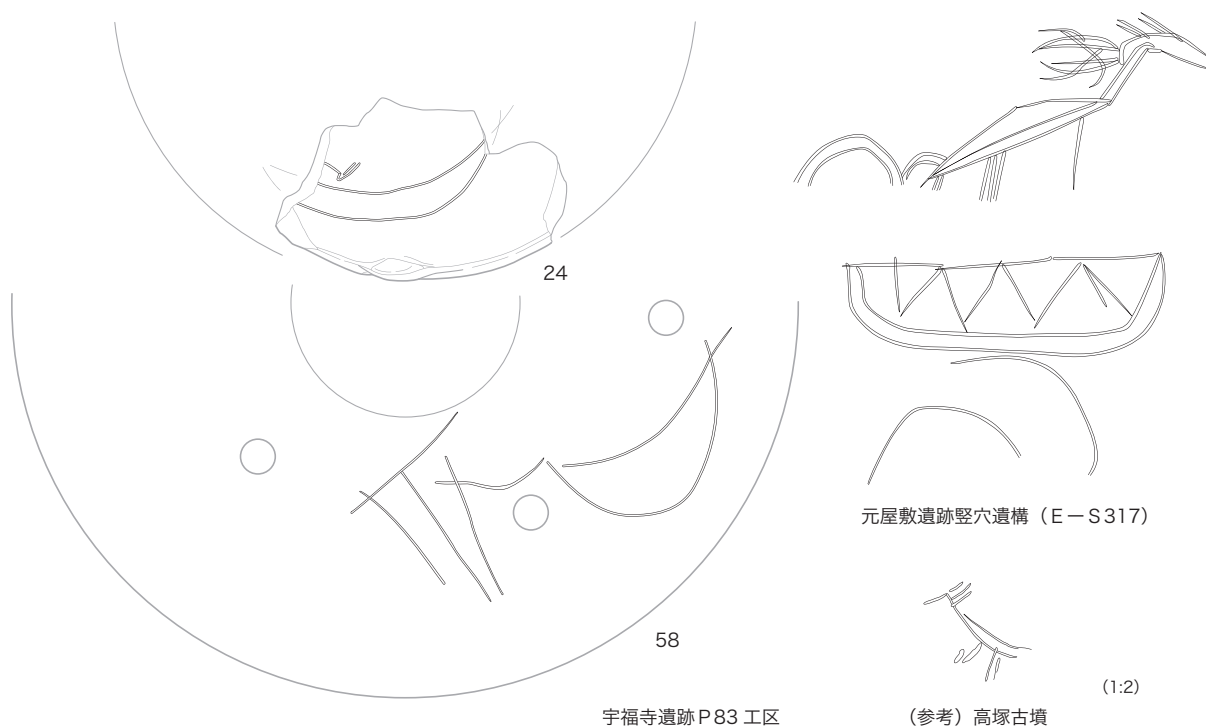
さて、宇福寺遺跡においては描出された図文は不明ながら、線刻土器が一定量出土した（24・58）。隣接する元屋敷遺跡においても、長軸 9.8 m、短軸 8.0 m の「竪穴遺構」（E-S317）から出土した鹿と船を線刻した壺をはじめとして、線刻土器の出土が同じく一定量認められる。なお、鹿と船を線刻した壺は、廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半におよそ相当する。

両遺跡で確認される線刻土器は、元屋敷遺跡の壺の図案が示すように、弥生時代から続く伝統性に起因する産物と思われ、両遺跡は新しい図文の採用に対しては概して積極的ではなかったと捉えられる。一方、八王子遺跡や朝日遺跡、あるいは古井遺跡群では、土器に線刻する図文として、人面文や弧帯文（組帯文）がしばしば採用される。これらの事例

廻間Ⅰ式後半～

廻間Ⅱ式後半

線刻土器



第276図 宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の土器に施された線刻（1:2）

は、宇福寺遺跡とその周辺の遺跡において伝統的な地域間関係が維持され、さらに小地域（水系）単位が完結する傾向にあったと類推したことにも通じる現象と思われる。

廻間Ⅲ式以降

廻間Ⅲ式以降は、布留式の精製器種とそれに対置される布留式の甕が一定量もたらされる。この現象については、「廻間様式の第2次拡散」（赤塚 1990）に呼応した現象であった可能性を指摘した。ただし、前段階と異なるのは、日光川水系の八王子遺跡、庄内川水系の志賀公園遺跡など、小地域間で他地域系土器の存在形態に明確な差異が顕在化しないことである。同時に、布留式の器種が顕在化する現象は、山陰系の器種が共存しつつ発現する傾向が認められたことにも注目した。また、同様の現象は北部九州など広域で認められる。このことは、地域社会相互の関係が大きく変化したことを示唆する。つまり、前段階までの小地域が連接する地域社会から、広域化を志向する地域社会に地域構造が変化したと考えられる。

以上が宇福寺遺跡とその周辺の地域における他地域系土器から帰納した推論である。今後はこれらの内容を踏まえ、改めて土器様式の構造変化との関係、古墳時代における地域社会の形成過程を理解する方向に議論を展開させることとしたい。

文献

- 青木一男1996「まとめ」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7—長野市内その5— 大星山古墳群・北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男1998「遺物各説」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36 長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男2001「倭国大乱期前後の箱清水式土器様式圏」『信濃』第53巻第11号 信濃史学会
- 赤塚次郎1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 加納俊介・浅野清春・北村和宏1988「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第86号 早稲田大学考古学会
- 斎藤弘之編2001『弥生の絵画 倭人の顔—描かれた2000年前の世界—』安城市歴史博物館
- 笹澤浩1978「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 笹澤浩1987「中部高地型の櫛描紋土器」『弥生文化の研究 第4巻 弥生土器Ⅱ』雄山閣出版
- 笹澤浩1988「コメント② 箱清水式土器について」『古代』第86号 早稲田大学考古学会
- 佐原真1959「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察—櫛描文と回転台をめぐって—」『私たちの考古学』20 考古学研究会
- 杉本厚典1999「崇禅寺遺跡の古墳時代初頭の土器様式」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 財団法人大阪市文化財協会
- 鈴木敏則1987「欠山様式とその前後—西遠型—」『欠山式土器とその前後』研究・報告編 愛知考古学談話会
- 鈴木正博1988「コメント① 十王台式土器について」『古代』第86号 早稲田大学考古学会
- 田嶋明人1986「考察—漆町遺跡出土土器の編年の考察—」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会
- 次山淳1995「波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布—」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版
- 次山淳1997「初期布留式土器の西方展開—中四国地方の事例から—」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 原田幹1994「S字甕の拡散からみた東海系土器の移動」『庄内式土器研究Ⅴ』庄内式土器研究会
- 原田幹1998「東海出土の北陸系土器—古墳時代初頭前後における広域土器交流の—様相—」『考古学フォーラム』10 考古学フォーラム
- 堀大介2002「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」『朝日山』朝日町文化財調査報告書第3集 朝日町教育委員会

遺跡文献

- 上木戸遺跡：宇賀神誠司1987『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—
上木戸遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2 長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 北平1号墳：青木一男編1996「北平塚・北平1号墳」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7—
長野市内その5— 大星山古墳群・北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 長野県
教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 松原遺跡：青木一男編1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3— 松原遺
跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36 長野県教育委
員会・長野県埋蔵文化財センター
- 御屋敷遺跡：寺島孝典2002『御屋敷遺跡』上山田町教育委員会
- 象鼻山1号墳：宇野隆夫編1998『象鼻山1号古墳—第2次発掘調査の成果—』養老町埋蔵文化財調査報告
第2冊 養老町教育委員会・富山大学考古学研究室
- 顔戸南遺跡：小野木学編2000『顔戸南遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第58集 財団法人岐
阜県文化財保護センター
- 元屋敷遺跡：澄田正一編1967『新編一宮市史 資料編2』一宮市／土本典生2004『元屋敷遺跡発掘調査
報告書Ⅱ』一宮市文化財調査報告Ⅳ 一宮市教育委員会
- 小森遺跡：加納俊介・浅野清春・北村和宏1988「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第88号
早稲田大学考古学会／早野浩二2002「愛知県岩倉市小森遺跡の再評価—他地域系土器からみた地域間
交流の問題を中心に—」『考古学フォーラム』15 考古学フォーラム
- 廻間遺跡：赤塚次郎編1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県
埋蔵文化財センター
- 月縄手遺跡：松田訓他1990「月縄手遺跡」『月縄手遺跡・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査
報告書第12集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 能田旭遺跡：市橋芳則1991『師勝町歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅰ 師勝町歴史民俗資料館
- 岩倉城遺跡：服部信博他1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集 財団法人愛
知県埋蔵文化財センター
- 吉田奥遺跡：大蔵順子他1992『上之山—愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群 広久手古窯跡群発掘調査報
告書—』瀬戸市教育委員会
- 高塚古墳：伊藤秋男編1994『高塚古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
- 朝日遺跡：宮腰健司編1994『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 財団法人愛知
県埋蔵文化財センター
- 岡島遺跡：松井直樹・鈴木とよ江編1994『岡島遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 西尾市
教育委員会
- 住崎遺跡：鈴木とよ江編1996『住崎遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 西尾市教育委員会
- 門間沼遺跡：石黒立人編1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集 財団法人愛
知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 中挟間遺跡：神谷真佐子・川崎みどり1999『中挟間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 安
城市教育委員会
- 志賀公園遺跡：早野浩二他2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 財団法
人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 八王子遺跡：赤塚次郎他2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 財団法人愛
知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 本川遺跡：佐藤公保他2003『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集 財団法人愛知県
教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 石塚遺跡：早野浩二2005「石塚遺跡」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県
- 貝蔵遺跡：和氣清章1999「伊勢における土器交流拠点」『庄内式土器研究XX』庄内式土器研究会
- 太田遺跡：西村匡広1996「太田遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）』奈良県立橿原考古学研究所
- 山陵町遺跡：楠本哲夫・入倉徳裕編1994『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』奈良県史跡名勝天然記
念物調査報告第67冊 奈良県立橿原考古学研究所

第5章 まとめ

立会調査

宇福寺遺跡は、掘削工事中に発見され、火急の対応が余儀なくされた遺跡である。遺跡の内容は、採取した遺物から知るのみであるので、報告のまとめとしては、遺跡の範囲と時代について記し、遺物の内容から可能な範囲で遺跡の性格を推測するに留めざるをえない。

遺跡の範囲

遺物を採取した工区は、P 86、P 84、P 83、P 82、P 81、P 80 の計6工区で、いずれの工区も、採取した遺物の大多数が古墳時代初頭～前期、2～4世紀の土器である。また、掘削に立ち会わなかったP 85工区についても、同様に土器が包含されていたことは疑いない。

遺跡の北限

P 86工区以北については、伝法寺本郷遺跡G区として調査したP 90工区が後背地に相当し、古墳時代の遺物も確認されないことから、遺跡の北限はP 89～87工区のいずれかに求められる。不確実ながら、後背地の一定の広がりを考慮すれば、遺跡の北限はP 88工区付近とするのが最も妥当であると思われる。

遺跡の南限

P 80工区以南については、P 78～70工区に後背地と河川が連続して出現することから、P 79工区付近が遺跡の南限付近に相当すると思われる。また、中之郷北遺跡A区として調査したP 65工区においても河川が確認されていることから、P 69～66工区においても後背地と河川が連続して展開することが予想される。つまり、P 78～65工区が宇福寺遺跡と中之郷北遺跡を画する河川と後背地に相当すると考えられる。ただし、中之郷北遺跡A区として調査したP 65工区において、宇福寺遺跡と同時期の遺物が一定量混在していた事実についても留意する必要がある。

遺跡の範囲

よって宇福寺遺跡の範囲は、P 88～79工区付近、南北約600mの範囲が想定される(第277図)。しかし、P 88～79工区が設定された地区は、一宮市と西春町の市町境が入り組み、遺跡の扱いを複雑にしている。というのも、詳細には、P 88～86工区が一宮市丹陽町伝法寺、P 85・83・82工区が西春町山之腰、P 84・81・80工区が一宮市丹陽町五日市場、P 79工区以南が西春町宇福寺にそれぞれ含まれ、立会調査によって推定した遺跡の範囲と西春町宇福寺地内は、ほとんど(遺跡の南限付近としたP 79工区を除いて)重ならないことになる。さらに遺跡の相当部分は一宮市に含まれることになるので、遺跡としての登録、今後の遺跡の取扱は一宮市側も西春町側に準じることが必要である。

遺跡の特質

集落の形成

遺跡の範囲は、現五条川を介して南北方向で約600mに達することを推定した。東西方向への遺跡の広がりについては不明であるものの、この規模は同時期の集落と比較しても、決して小さいものではない。P 83・82工区においてかなりの量の土器が出土したことから、遺構が濃密に展開していたことも予想され、古墳時代前期まで安定して集落形成が継続していたことも察せられる。

出土土器

遺跡から採取した遺物の大多数が古墳時代初頭～前期の土器である。出土土器は編年上、廻間Ⅰ式～松河戸Ⅰ式前半に相当し、量の多寡を問わなければ、出土する土器の型式には

明確な間断が認められない。この事実は集落が長期間、安定して維持されていたことを示す。

遺跡内部の構成については不明であるが、出土遺物の内容からは、P 83 工区に中部高地や北陸など他地域に系譜が求められる土器、線刻土器といった特徴的な遺物の出土が集中することから、P 83 工区付近にやや特異な空間があったことも想起される。P 82 工区においては、一括性が明晰で、壺が卓越する土器群、土器棺としての使用が推定される大型壺を確認したことから、付近には墓域の展開をも予測した。

他地域系土器と
線刻土器

さて、宇福寺遺跡の周辺において、ほぼ同時期に消長する遺跡として、岩倉市小森遺跡と一宮市元屋敷遺跡がある。小森遺跡は中部高地、東関東、北陸といった地域に系譜する土器の出土、元屋敷遺跡は線刻土器の出土が特徴的な遺跡である。また両遺跡とも、宇福寺遺跡と同じく廻間式を通じて継続する遺跡である。つまり、宇福寺遺跡と小森遺跡、元屋敷遺跡は、それぞれに消長を同じくし、特徴的な遺物を共有することから、これらの遺跡が相互に関係づけられつつ機能していたことは容易に察せられる。宇福寺遺跡の内容を理解するうえでは、周辺の遺跡との関係に対してより積極的に意識を向ける必要がある。

小森遺跡と
元屋敷遺跡

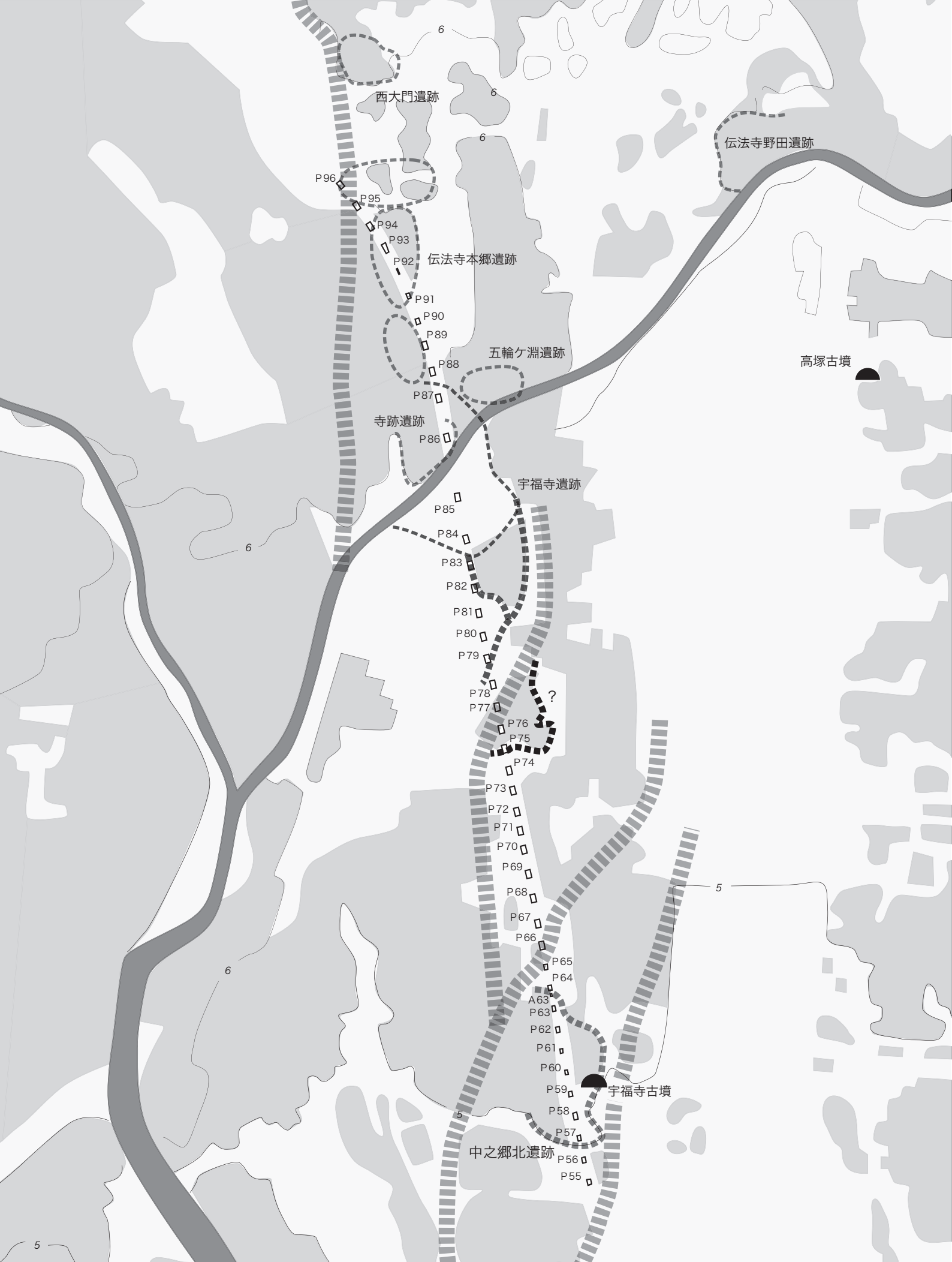
一方、P 86 工区において採取された中世陶器は、東に隣接する一宮市五輪ヶ淵遺跡、西に隣接する同寺跡遺跡との関係を示唆する。五輪ヶ淵遺跡は平成元年度の一宮市教育委員会による調査の結果、13～14世紀を主体とする中世の遺跡であることが判明している（寺跡遺跡は近世の遺跡として登録されているが、平成元年度の一宮市教育委員会による発掘調査では遺構、包含層とも確認されていない）。つまり、宇福寺遺跡の五条川以北の部分については、中世の遺構の展開が予測されることになる。

中世

しかし、遺跡と出土遺物にこれだけの興味深い内容がありながら、遺跡が破壊される光景をなすすべもなく傍観しなければならなかったことは痛恨の極みというほかはない。然るべき調査を経ていれば、古墳時代前期における体系的な編年網の構築、各地域と関係づけられた遺跡の実体の解明など、今日的な学問的課題に資した部分は大きかったに相違ない。その代償はあまりに大きい。

文献

- 澄田正一編1967『新編一宮市史 資料編二』一宮市
加納俊介・浅野清春・北村和宏1988「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第88号 早稲田大学考古学会
土本典生1991「伝法寺廃寺ほか2か所遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』6 平成元年度 愛知県教育委員会・財団法人愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2002「愛知県岩倉市小森遺跡の再評価―他地域系土器からみた地域間交流の問題を中心に―」『考古学フォーラム』15 考古学フォーラム
土本典生2003『西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書』一宮市文化財調査報告Ⅲ 一宮市教育委員会
土本典生2004『元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』一宮市文化財調査報告Ⅳ 一宮市教育委員会



第277図 宇福寺遺跡の範囲と周辺の遺跡 (1:10,000)

ふりがな	しまぎいせき・でんぼうじほんごういせき・なかのごうきたいせき
書名	島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第139集
編著者名	宮腰健司・鶴飼雅弘・早野浩二・山形秀樹・植田弥生・馬場健司・辻本裕也・藤根 久・長友純子・小村美代子・森 勇一他
編集機関	財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しまぎいせき 島崎遺跡	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 しまぎ 島崎	23203	02107	35度 17分 13秒	136度 49分 46秒	20010113 ∟ 20010327	2,000	県道高速 清洲一宮線 建設
でんぼうじほんごう 伝法寺本郷 いせき 遺跡	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 たんようちょうでんぼうじ 丹陽町伝法寺	23203	02108	35度 15分 35秒	136度 50分 36秒	20010409 20010530 20010827 20010919	1,600	
なかのごうきた 中之郷北 いせき 遺跡	あいちけんにしがすがいぐん 愛知県西春日井郡 にしはるちうなかのごう 西春町中之郷	23344	19016	35度 14分 37秒	136度 50分 52秒	20011003 ∟ 20020214	2,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島崎遺跡	集落	鎌倉～室町 江戸	溝・土坑・井戸 水田	山茶碗・常滑陶器 瀬戸美濃陶磁器 土師器皿・土師器鍋 銭貨・刀子	
伝法寺本郷 遺跡	集落	古墳 奈良～平安 鎌倉～室町 江戸	水田 河川・竪穴住居 溝 畠・水田	土師器 土師器・須恵器 山茶碗・古瀬戸・常滑陶器 瀬戸美濃陶器	奈良時代の集落
中之郷北 遺跡	集落	古墳 飛鳥～奈良 鎌倉～室町 江戸	溝・竪穴住居 河川・竪穴住居 溝 畠・水田	土師器・須恵器・鉄製品 土師器・須恵器 山茶碗・古瀬戸・常滑陶器 瀬戸美濃陶器	土師器の一括資料 古墳～奈良時代の金属 製品製作関連遺物の 出土

文書番号 (島崎遺跡)	発掘届出(12埋セ第173号 12.12.5) 終了届・保管証・発見届(12埋セ第220号 13.3.28)	通知(12教生第216-40号 12.12.25) 鑑査結果通知(12教生第216-40号 13.5.28)
文書番号 (中之郷北遺跡)	発掘届出(12埋セ第208-14号 13.3.16) 終了届・保管証・発見届(13埋セ第101号 13.9.27)	通知(12教生第216-46号 13.3.28) 鑑査結果通知(13教生第216-46号 13.10.11)
文書番号 (伝法寺本郷遺跡)	発掘届出(13埋セ第72号 13.8.24) 終了届・保管証・発見届(13埋セ第169号 14.2.28)	通知(13教生第36-10号 13.9.13) 鑑査結果通知(13教生第36-10号 14.3.27)

要約	島崎遺跡は、鎌倉～室町時代には、遺跡中央部が集落域となり、北東―南西に延びる微高地地形に沿うような、溝・井戸・方形土坑が検出されている。 伝法寺本郷遺跡は、古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の複合遺跡である。発掘調査の結果、各時代を通じた土地利用の変遷が明らかとなった。 中之郷北遺跡は、古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の複合遺跡である。発掘調査では各時代の遺構と遺物が層序ごとに連続して検出された。発掘調査の成果は、当地域における地形発達史、土地利用史に資する重要な知見である。 なお、立会調査によって発見された宇福寺遺跡においては、古墳時代の土器を大量に採集した。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第139集

島 崎 遺 跡
伝 法 寺 本 郷 遺 跡
中 之 郷 北 遺 跡

2006年3月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社